

「移行期の子どものためにタグを」



教会教育室長 中島 啓一

イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために上京した。ところが、祭が終って帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。
ルカ2・42、43

新学期を迎え、小学科から中学科（中高科）へと進級する生徒、中高の卒業に伴い教会学校（CS）を卒業する生徒もいることでしょう。

この移行期は、多くの場合、子どもたちの信仰にとって大きな危機の時です。勉強や部活、付き合いが忙しくなり、独立心の芽生えなどによって教会から足が遠のきやすくなるのです。

主イエスの少年時代のエピソードは、移行期の子どもを持つ親やCS教師にとって大切なこと（テキストの中心メッセージではありませんが）を教えてください。個所でありませう。

イスラエルの巡礼は、道中、成人男性組と女性・子ども組に分かれて歩きました。その時の主イエスは12歳、イスラエルの成人である13歳を前にまさに

移行期の年齢でした。11歳までは全くの子どもです。から、女性・子ども組に属するものでした。13歳になれば父親と共に成人男性組に属するものとなります。しかし移行期の12歳はそのどちらでもあり、どちらでもない年齢だったのです。息子はまだ子どもだから母親と共にいるだろうと父ヨセフは思っていました。来年成人する息子は、父親と共にいて成人の心得を学んでいるのだらうと母マリヤは思っていました。しかし実際はそのどちらでもありませんでした。そして彼らはそれに気づかず、一日路を行ってしまい、わが子を見失ったのです。

私たちCS教師は、彼らのように責任をお互いに任せ合って、大切な生徒を見失ってはなりません。移行期の子は受け入れ側の次の科だけが見るのでなく、これまでの科と次の科の両方で見えるのです。卒業する生徒は、次の受け皿である青年会などとタグを組み、しっかりと次につなげて行くのです。様々な枠を越えて、教会全体の中で必要なあらゆるタグを組み、子どもたちが教会の中に自分たちの居場所を見つけることができるように配慮し、導いて行く、そこまでがCS教師の責任ではないでしょうか。

前号の牧羊ひろばで紹介された九州教区ネクジエネは素晴らしい取り組みだと思います。他にも良い方策があればぜひ分かち合ってください。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座	4
「♪さんび」・・・まず、あなたがいきいき！	No 4
復活	4 / 5
旧約⑤「士師」	4 / 19
聖霊	5 / 24
キリストの教え	5 / 31
牧羊ひろば（防府新田教会）	6 / 28
カリキュラム解説	91
「牧羊者」のご購読・ご利用について	92
おわりに	92

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）



●復活

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月5日
イースター
・進級式

主イエスの復活
マタイ 28・1～10

同 6 節

12 日

共におられる
との約束
マタイ 28・16～20

同 20 節

●旧約⑤士師

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月19日

ギデオンの召命
士師 6・7～16

同 12 節

26 日

ギデオンの精銳
士師 7・1～8

同 2 節

●聖霊

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

5月24日 ペテコステ
聖霊降臨の約束
使徒 1・3～8

同 8 節

●キリストの教え

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

5月31日

荒野での誘惑
マタイ 4・1～11

同 10 節

6月7日

イエスの宣教開始
マタイ 4・12～17

同 17 節

14 日
花の日・
子どもの日

空の鳥・野の花
マタイ 6・25～34

同 28 節

21 日
父の日

天の父への祈り
マタイ 7・7～12

同 11 節

28 日

岩を土台とする生涯
マタイ 7・24～27

同 24 節

5月3日

サムソン
士師 16・15～22

同 17 節

10 日

母の日
ハンナの祈り
サムエル上 1・1～20

同 17 節

17 日

幼な子サムエル
サムエル上 3・1～14

同 9 節

ミセス・グレースからあなたに ♪さんび・・・まず、あなたがいきいき！ No.4

音楽工房GRACE K&K(株)

田中恵子(神戸中央教会員)



あなたが、ふと、孤独を感じたり、迷ったり、つらいと感じたりしたとき、まず何をしますか？

質問者の希望としては、〈祈る〉がほしい回答ですね。

次は为什么呢？ 模範解答とすれば〈賛美する〉をいただきたいですね。

「ビリーブ」という曲をご存知でしょうか？

私のコンサートのアncコールによく登場し、集われた皆さんと歌います。

この歌の歌詞は、証を交えたおしゃべりコンサートの締めくくりにとってもマッチするものです。「アメイジンググレイス」で神様の愛を、「YOU ARE SPECIAL」で価値ある一人一人を、「おおしくあれ強くあれ」で共におられる方と歩む幸いをお伝えしてい

ます。

ただのコンサートではなく、伝道メッセージのコンサートです。

♪

たとえば君が 傷ついて

くじけそうに なった時は

かならずぼくが そばにいて

ささえてあげるよ その肩を

世界中の 希望のせて

この地球は まわってる

いま未来の 扉を開けるととき

悲しみや 苦しみが

いつの日か 喜びに変わるだろう

アイ ビリーブ イン フューチャー 信じてる

この曲名は、「ビリーブ」。この歌詞の「悲しみや 苦しみが いつの日か 喜びに変わる」ここが最高にいい。もったいいのは「神様によって、変えてくださる」と入りたいところなのですが…。

聖書の中に、「主は言われる、わたしがあなたがたに對していだいてる計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。その時、あなたがたはわたしに呼びわたり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会うと主は言われる」(エレミヤ 29・11～14)とあります。私たちは神様のご計画の中で生かされていて、その計画は将来・希望・平安を与えるものだ。

そのご計画の中で起こる出来事のすべて、特に、自分

にとってマイナスなもの、悲しみ・辛さ・苦しみは、良いことと同様、神様が全部ご存知なのです。その上で神様は、その人に一番いいように導いてくださる方なのです。気が付くと、あの時の苦労は、つらさは、悩みは、みんな喜びに変えられていることを知ります。信仰を持たしていただいたものは、そのことを体験済みなのです。

ダビデが詩篇の中でたくさんの賛美を作っていますね。彼の賛美は、嘆き、悔い改め、訴え、とりなし、感謝と多岐にわたっています。それら一つ一つは、全く真実なものです。何か取り繕って、いい恰好をしてではなく赤裸々なダビデの思いです。それらを読むときにわたしも主の前にそのままの私で立てばいいことを教えられます。祈りも賛美も私たちを様々しながらみから解放してくださり、神様に近づけてくださる手段なのです。

この祈りと賛美は子どもたちにも簡単にできるのです。祈りは神様とお話すること、賛美は神様を誉め讃えることですから。



そうそう、「教会学校のお友達の5つのつとめ！」って聞いたことがありますか？

私宅は、自宅を開放しての教会学校をひらいています。主人の父が受洗後すぐ始めて、今年で66年。始めた人はすでに天国ですが、その遺志のほんのひとかけらですが継続されています。生徒数もガーンと減りました。もちろん最盛期の頃と比べると子供の数が絶対的に少ないのは事実。小学校が統合され近くなかったのも事実。しかし、最近、亡き父の口癖だった「何とかして幼子を神様のもとに」の熱意が私たちには希薄なのかもしれないと思います。

父は、仕事をしながらの奉仕のため、訪問はいつも夕方から夜。時に同行しましたが、その熱意たるや、「そこまでせんでも…」と思うものでした。ある意味猪突猛進のところがあったかなと思いますが、到底今の私たちには真似のできないことでした。父の生きがいはCS伝道でした。

毎週、週報が作成されました。最初は母の手作りガリ版、時代が進み今はP.C.。その中に、耳にタコができるのでは？と思うほどに書かれていたのは、「教会学校

のお友達の5つのつとめ」。

- ① お祈りをする
- ② 教会学校をやすまない
- ③ 献金をする
- ④ お友達を教会学校に誘う
- ⑤ 聖書を読む

私はここに「賛美を歌う」を入れたい。

祝福の源は神様です。こどもたちが、ひとり残らず、この恵みに浴することができるよう私たちには祈りつつご奉仕に励みましょう。

神様の恵みによつて、まず、あなたがいきいき！……ね。

さて、ここからは、田中恵子アレンジ牧羊者第2弾！今回は、「両手いっぱい愛」です。さあ、チャレンジしてください。

♩Coda

る くださった それは ぼくの つみの たーめ ごめんねありがとう

イエスさま それは ぼくの つみの たーめ ごめんねありがとう

イエスさま ごめんねありがとう イエスさま

イエスさまの十字架の愛に、本当に素直にごめんなさいと歌う曲はこの曲しかないように思います。子どもも大人も心から歌いましょう。伴奏は、少し高度に作ってあります。指使いなどよく考えて丁寧に練習してくださいね。

Arr. KEIKO恵TANAKA

両手いっぱいの愛

Arr. KEIKO 恵TANAKA

Allegro

Piano

あ

る日イエスさまにきいてみたんだ どれくらいほくをあ いしてるの これくらいかな こちどイエスさまに

る日イエスさまは こたえてくれた し ずかにりょうてをひ ろ げ て そ のてのひらにくれくらいかな イエ スさまはだまって ほほえんで る 2もうい ほほえんで

聖書 マタイ28・1～10 テーマ 復活の主による喜び

序論

(金井信生)

イースターおめでとうございます。私たちに代わって十字架に死んでくださったイエスは、よみがえられ、私たちに新しい命を与えてくださいました。

一、「平安あれ」

安息日が終わった明け方、イエスの墓を訪ねた二人のマリヤの前に、み使いが現れ、「イエスはよみがえられた」と告げました。そして弟子たちのもとに戻ろうとする二人に、イエスが「平安あれ」と声をかけられました。

戸惑い恐れながら帰ろうとする女たちに、イエスは「平安」を託されました。弟子たちもまた不安と恐れに閉じ込められているからです。

十字架直前の最後のメッセージでも、イエスは「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える」(ヨハネ14・27)と語っておられました。

言葉そのものは「シャローム」という、ユダヤ人にとって平凡で日常的なあいさつです。しかし、ただ祝福を願う言葉としてではなく、私たちがいだくすべての恐れや不安に打ち勝ち、吹き飛ばすお方が、現実のものとして「平安あれ」と宣言しておられるのです。「光あれ」と主が命じられると闇の中に光が現れました。主によって心にもいつも平安をどっかりと据えていただける幸いをおぼえます。

二、御国に目覚める朝を望んで

主イエスの復活は、神の救いの確証です。イエスを見捨てて逃げ去った弟子たちも、さらにはイエスを十字架につけたもののさえも、神の前に罪が赦されて新しい命に生かすために、主はよみがえられました。

「恐れることはない」との主の言葉は、よみがえられた主が、これからずっと共にいてくださることを信じる者が、生涯握り続けることのできる約束です。イエスはご自身が経験されたように、私たちが生きていく以上は必ず、別れ、失う悲しみがあり、病や痛みを負う苦しみがあり、ひとりぼっちの思いに沈むことがあることも

知っておられます。

しかし、悲しみは慰められる、苦しみや痛みはいやされる、あなたは決して孤独ではない、わたしが共にいるし、あなたを助ける人が必ずいる、それがイエスの「恐れることはない」との励ましの言葉です。私たちの人生のさまざまな場面にも、イエスの復活の光が届いているからです。

やがて私たちは、地上の生涯を閉じるときが来ます。しかしその時も、イエスの手に委ねていれば、永遠の御国に目覚める希望があり、平安を得ることができます。

三、信仰による夜明け

イエスに従ってきた人たちは、これまでもイエスを信じてはいました。しかし、イエスの復活は、その信仰が問われるときです。

墓の口が開いたのは、すでにイエスは復活しておられますから、そこからイエスが出てくるためではなく、中が空っぽなのを見せるためです。空っぽの墓を見てどう判断するのか、信仰が問われています。

しばらくして、十一人の弟子たちは、ガリラヤでイエ

スに会って拝しますが、目の前にイエスが立たれても、まだ疑う者もいたとあります。

私たちがイエスの復活を信じるとき、自分が納得できたら信じようと思っているなら決して信じることはできません。今、私たちは、神から与えられた言葉である聖書を通して神を信じ、救い主イエスを信じて歩み出す中で、生きておられるイエスにお出会いすることができま

す。そして、イエスと出会ってはじめて、復活が自分にとつてどのような意味を持っているのかを悟ることができ

るようになります。

疑いや迷いはあります。しかし、イエスが、こんな弱い疑いや弱い者を救済し救うために十字架に死んでくださったこと、そして、私と共に生きるために復活してくださったことを信じましょう。いつも主の命の光の中に、平安と希望をもって生きることができます。

結論

復活のキリストにお出会いするとき、失望や恐れは喜びに変えられ、平安があふれます。信仰によってキリストを拝しましょう。

研究資料

(中島啓一)

福音書記者たちは、復活の場面を直接には描いていない。最初の証言は、空の墓^{から}という証拠を伴った、天的な存在(マタイでは「主の使」)による報告である。もちろん墓が空でなければ、教会がイエスの復活を信仰の中心に据えることは不可能であった。しかし空の墓は逆の立場の論拠にもなり得る(28・13)。それ単独では、信仰のきつかけとはなっても、復活の確固たる証拠にはなり得ない。復活のイエスと会った者の目撃証言が不可欠なのである。その最初の証人となったのが女性たちであった。この聖書の女性観は、その時代の女性観を全く覆すものであったと言える。現代と比べて女性の証言が著しく軽んじられていた時代背景の中で、もし福音書が人の手による創作であったならば、この重要な役割は、決して女性には託されなかったであろう。逆説的であるがこのこともまた、主の復活と、それにまつわる聖書の記述の信頼性を力強く証しするものであると言える。

テキスト

1 安息日が終って 安息日は土曜日の日没をもって終

わるが、安全と視界確保のために、週の初めの日の明け方まで待たねばならなかった。マグダラのマリヤすべての福音書が復活の最初の証人として挙げている。ほかのマリヤ「ヤコブとヨセフ」(27・56、マルコ15・40では「小ヤコブとヨセ」)の母であろう。「クロパの妻マリヤ」(ヨハネ19・25)と同一かも知れない。墓を見にきた亡骸に香料を塗るため(マルコ16・1)。

2 主の使が石をわきへころがし 女性たちが墓に入るためであって、イエスが墓から出るためではない。その上にすわった 死の象徴である墓石の上に座することは、死に対する勝利をあらわしている。

4 見張りをしていた人たち 祭司長たちの意向を受けて墓の番をしていた(27・62・66)。恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった 大きな地震に加えて、光り輝く御使いの姿は、彼らを恐れさせるに十分であった。体が硬直し、気絶したのである。死人の番をしていた彼らが死人のようになり、彼らが守っていた死人が死からよみがえったことは、極めて皮肉なことであった。

5・6 恐れることはない 直訳すると「彼らのように」あなたがたまで恐れてはならない。十字架におか

かりになったイエス…もうここにはおられない 死者の中にイエスを見出そうとするならば、彼らのようになる。捜す場所はここではない。よみがえられたのである 直訳は「よみがえらされた」(受動態)。動作主は、言うまでもなく神。イエスの復活は父なる神のみわざである。

かねて言われたとおりに イエス自身が復活を予告していた(16・21、17・23等)。イエスが納められていた場所を「ごらんさい」御使いは女性たちに、イエスの体がそこにあることを確認させる。しかし復活への信仰は、空の墓という事実だけから起こるものではない。そのため、後にイエスがご自身を現してくださるのである。

7 弟子たちにごう伝えなさい 女性たちは御使いから、弟子たちへのメッセージを託された。イエスは死人の中からよみがえられた 「(神によつて) よみがえらされた」(6節と同じ)。これこそが教会の信仰告白の礎石である。あなたがたより先にガリラヤへ行かれる… 26・32参照。イエスもすぐ後で同じことを語られる(10)。あなたがたに、これだけ言っておく 以上の言葉が、神からの権威ある啓示であることを強調している。

8 恐れながらも大喜びで 女性たちはなお恐れつつも

「非常な喜び」(2・10と同じ)で満たされた。急いで墓を立ち去り 女性たちは、御使いの「急いで行つて」(7)という命令に、その通りに応答した。

9 イエスは彼らに出会って… 女性たちへの復活のイエスの顕現は、この福音書のクライマックスの一つである。彼女たちは、復活の主を最初に目撃するという特権にもあずかったのである。イエスのみ足をいだいて拝した イエスが復活されたという事実だけでなく、復活がイエスの言葉と活動とを立証するものであるゆえ、女性たちはイエスを礼拝せずにはいられなかったのである。

10 イエスは彼らに言われた… 御使いと同じメッセージを、イエスご自身も女性たちに託した。兄弟たちにイエスはたびたび弟子たちを兄弟と呼ばれた(12・50、25・40、ヨハネ20・17等)。見落としてはならないのは、弟子たちがイエスを見捨てて逃げた後にもかかわらず、彼らを「兄弟たち」と呼び続けておられることである。ここにも神の大きな愛と赦し^{ゆるし}が表されている。

参考文献 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ28・1～10

タイトル

永遠の希望と喜び

暗唱聖句

もうここにはおられない。かねて言われたとおり、よみがえられたのである。

マタイ28・6

目標

復活のキリストによつて失望や恐れを喜びに変えて頂く。

導入

(飯田勝彦)

みんなは、これまでに一番悲しかったことは何でしたか？ いろいろあるでしょう。これから生きていく中で、悲しいことやガツカリすることがあると思います。でも誰もが経験する悲しみや絶望が、喜びに変えられたなら、どんなに素晴らしいでしょうか。イエス様は、私たちにいつも喜び、どんなことにも感謝できる生き方を与えてくださる方です。

今日の個所にも、悲しみの中に落とされた人たちが出てきます。でも、その深い悲しみが永遠の喜びに変えられたのです。

十字架にかかれたイエス様

先週は受難週でしたが、みんなはイエス様の十字架の苦しみを少しでも思いながら過ごせましたか。

イエス様が十字架にかかり死なれたのはどうしてだったでしょう？ それは、罪にまみれて苦しむ私たちを救い、生き活きとした人生を歩むことができるようになるためでした。イエス様は、私たちを幸せにするために、十字架から逃げないで、進んで行かれたのです。

イエス様は、苦しく残酷な十字架にかかる前にも、顔を背けたくなるような辛い体験をされました。それは、親しい者から裏切られ、多くの人々からバカにされ、鞭打たれ、徹底的に侮辱されました。そして最後は、手足に釘を打たれ、頭には茨の冠をかぶせられ十字架に付けられました。イエス様はその十字架の上で血を流しながら死ぬまで苦しまれたのです。それほどまでにしなければならないほどに、私たちの内にある罪は恐ろしいものなのです。もし、罪をそのままにしておくなら、罪はあなたを苦しめます。イエス様の十字架だけが、私たちを罪から救ってくださいます。

墓に葬られたイエス様

イエス様の弟子たちは、イエス様を裏切って逃げて行きました。でも、大勢の婦人たちはイエス様の最後を見届けたのです。婦人たちは、今までずっとイエス様を慕い従ってきました。そのイエス様が目の前で苦しみながら死んで行く姿を見て、彼女たちは悲しみのどん底に突き落とされてしまいました。

ヨセフという人が、イエス様の遺体を引き取り亜麻布で包み、墓に納めました。当時の墓は、岩を掘って作った穴で、入り口には大きな石を転がしてふたをしていました。ヨセフがイエス様の遺体を墓に納めた後、一緒にいたマグダラのマリヤともう一人のマリヤは、墓に残りそこに座ったのです。彼女たちは、悲しみでいっぱいである希望を失ってしまったに違いありません。彼女たちは、涙がかるほど墓の前で泣いたでしょう。

もし、死んで墓に納められて終わりなら、どこに希望と喜びがあるでしょうか。

よみがえられたイエス様

イエス様を信じる人にとって「死」は、悲しみと失望

で終わりません。なぜなら、よみがえりがあるからです。

イエス様が死んでから3日目に、マグダラのマリヤたちは、イエス様の墓に行きました。すると、大きな地震があり、御使いが現れました。そして婦人たちに「恐れることはしない。あなたがたの捜しているイエスは、ここにはおられない。かねてから言われたとおり、よみがえられたのだ」と言いました。今まで悲しみと失望の中にいた婦人たちでしたが、イエス様がよみがえられたことを聞いて、非常に喜んだのです。そして、それを弟子たちに伝えに行く途中、よみがえられたイエス様に出会うことができました。

まとめ

イエス様を心から信じている人は、悲しく落ち込むことがあつたとしても、よみがえりのイエス様の命によって苦しみを耐え、乗り越えることができます。そして、イエス様のよみがえりの命によって希望と喜びをもって生活することができます。この希望と喜びは永遠に続く恵みなのです。この恵みを頂きましょう。

♪歌ごえ高く♪ (ホ 50)

聖書 マタイ28・16〜20 テーマ 共におられるとの約束

序論

(大頭眞一)

復活されたイエスは、天に昇られる前、弟子たちにお言葉を残していかれた。それは、イエスを信じる私たちにも与えられているお言葉である。

一、信仰への招き

復活のイエスを「疑う者もいた」。しかし、イエスは疑う者も含めて「彼らに近づいてきて」くださったことに目をとめたい。私たちは信仰の弱さを覚えるとき、主を遠く感じる。けれども、そのときこそ主は最も近づいていくのだ。復活の主を疑った代表格はトマス。主はトマスに近づいて、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20・27)とおっしゃってくださいたことを思い出そう。

二、宣教のご命令

「天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」主イエスは「それゆえに」宣教を命令される。その権威は神の子としての権威であるだけでなく、十字架と復活を通られたことによつて父から与えられた二重の権威である。この権威が及ばないところはどこにもない。私たちの宣教は主の権威の及ばないところで行われるのではない。それがたとえ地の果てであっても、また日本のような偶像の国であっても、主の権威の下にある場所であることを覚えたい。

大宣教命令の内容である「弟子とし」、「父と子と聖霊との名によつて、彼らにバプテスマを施し」、「命じておいたいっさいのことは守るよう」に教えよ」はいずれも、宣教の目的が一回かぎりの決心ではなく、生涯を通していよいよ神との交わりに進むキリスト者を誕生させることにあることを示す。特に「父と子と聖霊との名」というときの名は単数であり、神の三位一体性を示している(新改訳聖書欄外註)。三位一体の神は、愛の交わりのうちに一つの神である。そのありさまは「ペリコレーシス、すなわち相互内在・相互浸透と表現されてきた(マ

クグラス「キリスト教神学入門」445頁）。バプテスマによつてキリスト者は、ご自身交わりの神である三位の神との交わりへと招かれる。そして、その交わりのうちにキリスト者は宣教に遣わされるのである。このことをヨハネ17章は余すところなく描く。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによつて、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります」（21）とあるように。

三、臨在の約束

昇天後も、主イエスは（いつもあなたがたと共にいる）と約束された。遍在（へんざい）（どこにでも存在すること）は神の性質である。インマヌエルの神である主が私たちとともにいてくださるのだ。

けれども、ここでの臨在の約束は、信仰者ひとり一人に与えられている約束であると同時に、特に宣教する教会に向けられている約束であることに注意したい。キリ

ストは「そのからだなる教会のかしらである」（コロサイ1・18）。主は教会と一体でいてくださる。教会の喜びや苦しみは、主の喜びや苦しみである。かつて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」とおっしゃった主は今も教会と喜びや苦しみをともしにしていってください。現実の教会がいかに問題だらけであるかは言うを待たない。教会の歴史がそれを語っている。何よりも私たち自身がはなだ不完全で恥じ入るようなお互いである。けれども、そんな教会と共に宣教することを、主はお選びくださった。そして時に教会が誤り、私たちがつまずきとなるときにも、主は私たちと共にとどまってください。そして、私たちを励まし、懲らし、悔い改めに導いてくださる。そして、何度でももう一度立ち上がらせてくださるのである。

結論

宣教は主の命令である。主はこの光栄あるわざをご自身の権威をもつて可能とし、ご自身が共にいてくださることによつて続行させてくださる。インマヌエルの主の招きに応じて、日々主を証しし続ける者であらう。

研究資料

(宮澤清志)

本日まで「復活」という單元での聖書箇所である。マタイの隠された主題のひとつはこの「共におられる主」(インマヌエル)ということである。マタイはこの主題によって福音書を書き出し(1・23)、この主題によって福音書を閉じる。同時にこの主題はマタイの中間にもみられる(18・20)。マタイのイエス像の一つは、この「共におられる主」であるということができるのである。

テキスト

16 十一人の弟子たち ユダの死を計算に入れた数字(27・5)。ガリラヤ 復活の主イエスがガリラヤで弟子たちにお会いになった記事は、この箇所とヨハネ21章に述べられている。イエスが彼らに行くように命じられた山 具体的な「山」の記述は出てこない。しかし、マタイにおいては、山は神的顕現(カウゼン)の象徴として、また日常の世界から離れた啓示の場、ないしは救いの場として描かれている(4・8、5・1、15・29、17・1)。

17 拝した 礼拝した(新改訳)。疑う者もいた この言葉は注目に値する。実は、この「疑う者」が誰なのか

で、この箇所の語り方も変わってくる。例えば16節の「十一人の弟子たちは」を主語として、この場面には復活の主と十一人の弟子がいたとすると、疑ったのは礼拝している十一人の弟子たちということになる。しかし、「ある者は疑った」(新改訳)と取った場合、この場所には十一人の弟子たちの他にも人々がいたことも推測され、パウロが「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた」(1コリント15・6)という場面をここに見ることもできる。同時に「疑った」人々とは、この「兄弟たち」ということも可能性を残す。いずれにしても、復活者の顕現によって、信仰に導かれる者となお疑う者とに分極化したという見方である。また、マタイが「疑った」という言葉を用いるに際して、「礼拝」と結びつけている(この箇所と14・31)ことから考えると、礼拝しつつも疑ってしまいう弱い人間性を指摘しているとも言える。

18 権威

イエスへの権威の与え主は父なる神である。イエスは荒野の試みにおいて、サタンからの試みを決然と拒否し、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」(4・8〜10)と、ただ神にのみ仕える道を進んで行かれた。ここにおい

て、イエスは十字架への道を決然と進んで行かれたのである。しかし、この十字架と、それに続く復活を通じてこそ、天上・天下一切の権威がその手に託されたのである。

19〜20 イエスは、この「神の子」としての権威により、大宣教命令を出されるのである。その命令は「行って、すべての国民を弟子とする」ことである。この箇所ですべての**国民**とあるが、特筆すべきは**マタイ**がイエスの復活において世界的伝道の視点を持ったと言うことである。復活前のイエスの時代には、福音はイスラエルに限定して語られていた（参考 10・5〜6、15・24）が、イスラエルが福音を拒否した結果、福音は異邦人に対しても語られる時代に突入した。イエスの復活によって新しい時代の幕が開いたと言える。

また、その弟子たちに命じられることは、「父と子と聖霊との名によって、人々にバプテスマを施すこと」であり、また「命じられたいっさいのことを守るように教えること」であった。前者について言えば、三位一体の神との結合という意味合いがそこにはある。**名**によってとは、名の中へ、すなわち父、子、聖霊の神ご自身との

生きた交わりに入ることを表わす。また、後者の**教える**とは、教え続けるという継続を表す言葉であり、またその内容は、**命じておきたいいっさいのこと**とあるように、山上の垂訓を初めとするこの福音書に記されているイエスの教えのすべてであると考えられる。**見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである** マタイによる福音書の特徴は、イエスを常に信仰者と共にいるお方（インマヌエル）として描いているということである（1・23、18・20）。マタイによる福音書のイエスは、徹頭徹尾「インマヌエル」で貫かれているといってもよい。洗礼を受けて、主イエスの教えの一切を守ることができるのは、主イエスが信仰者と共にいてくださるからである。

最後に、この箇所に「すべての」「いっさいの」「いつも」という句が繰り返されていることも見逃すことができない。福音はすべての人間に、聖書におけるすべての内容を、すべての時に、主の弟子たちによって、伝えられなければならないのである。

参考図書 デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換上』（東京ミッション研究所）、他

聖書

マタイ28・16～20

タイトル

一緒にいてくださるイエス様

暗唱聖句

見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたと共にいるのである。

マタイ28・20

目標

共におられる主を覚え、宣教に遣わされる者となる。

導入

(飯田勝彦)

新しい学年になり、少し慣れましたか？ クラス替えのあったお友だちは、新しいお友だちが出来たでしょうか。もし、みんなの友だちが「これからずっとずっと、友だちでいようね」と言ってくれたら嬉しいでしょう。では、イエス様から同じ言葉を言われたらどうでしょう？ イエス様は心からみんなに「どんな時でも、あなたから離れずにいつも一緒にいるよ」と約束してくださいます。

イエス様の復活を信じる

イエス様は、どうして「いつまでも一緒にいる」と言ってくくださるのでしょうか？ それは、みんなを心から愛

していてくださるからです。みんなも大好きな友だちといつまでも一緒にいたい、と思うでしょう。イエス様も同じです。イエス様は、罪で苦しんでいる私たちを自由にするために十字架で死なれました。しかし、イースター礼拝で聞いたように、イエス様は死んで終わったのではなく、3日目に死の力に打ち勝って復活されました。そして、弟子たちの前に自分が復活したことを現してくだしました。でも、弟子たちの中には、復活を信じる人と疑う人がいました。みんなはイエス様の復活を心から信じていますか？「ビミヨク(微妙)」って言う人がいますか。イエス様の復活を信じるなら、私たちの心に力と大きな喜びがわき出てきます。イエス様は、皆さんがイエス様の復活を信じる事を願っておられます。

イエス様を伝える

復活されたイエス様が、弟子たちに「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいの事を守るように教えなさい」と言われました。これは、イエス様の「大宣教命令」と言われるものです。イエス様は、このすばらしい福音をすべて

の人に伝えなさいと弟子たちに命令されたのです。私たちを愛し、力と恵みをいっぱい与えてくださるイエス様を、自分だけのものにしておいても良いでしょうか。

みんなは、嬉しいことや楽しいことがあったら友だちやお父さんお母さん、兄弟姉妹に黙っていられなくて思わず言ってしまうと思います。そのように、復活されたイエス様を多くの人たちに伝えて行きましょう。イエス様が弟子たちに言われたこの「大宣教命令」は、今の私たちにも言われていることです。そして、イエス様はみんながイエス様の事を一人でも多くの人たちに伝えて行くことを期待して用いてくださいます。

イエス様は共におられる

弟子たちにはイエス様を伝えるに行くために、何が助けになったでしょうか。それは、「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と言うイエス様の約束でした。イエス様は弟子たちだけに宣教に行かせて「わたしは知りません。あとは頼みます」と言われませんでした。

イエス様は、弟子たちと共に行ってくださるのです。それも、世の終わりまでいつも共にいてくださるのです。

イエス様が十字架で死なれた時、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいましたし、彼らは心の中で「もうすべてが終わりだ」と思ったに違いありません。でも、イエス様は、裏切った弟子たちを見捨てないで彼らの前に現れたのです。そして「世の終わりまで共にいる」と約束されました。

イエス様が弟子たちに言われたこの言葉を今朝、同じようにみんなにも言われます。イエス様のことを思う時にも思わない時でも、どんな場所でもイエス様は、いつも共にいてくださいます。そして私たちをイエス様を伝える宣教のために用いてくださいます。イエス様のそばで、イエス様のお役に立てるなんて素晴らしいですね。

まとめ

イエス様が死より復活し、世の終わりまでいつも共にいてくださると信じる時、みんなの心は守られ力が与えられます。事実、み言葉で約束して励まして下さいます。私たちは喜んでイエス様を伝えることが出来ます。今も共におられるイエス様を信じて、家族や友だちの所にイエス様と共に遣わされて行きましょう。

♪主はよろこびです♪ (ホ76)

聖書 士師6・7・16 テーマ 勇士として立つ

序論

(高橋頼男)

イスラエルがカナンに進入してから王制が出来るまでの約二百年間が士師記の時代です。当時、各部族はゆるやかな連合制の中でそれぞれ独立したあり方を取っていたため、強力な外敵の攻撃に対しては弱く、しばしば侵略を受けました。それは彼らが偶像礼拝を行って靈的に墮落したときに起こりました。圧迫された民が神に叫び求めた時、神は「士師」と呼ばれる解放者を起こし、イスラエルを救い出されました。士師記に登場する十二人の士師の中で、ギデオンは五番目の士師です。

当時、イスラエルを圧迫したのはミデアン人とアマレク人でした。遊牧民である彼らは、毎年収穫の時期になると、いなごの大群のように大挙してイスラエルを襲い、地の産物を根こそぎ奪っていききました。そんなことが七年も続き、全く疲弊して弱ってしまったイスラエルの民は、こらえきれず主に叫び求めます。そんな状況の中で神が救済者、解放者として選ばれたのがギデオンです。

一、臆病者の士師(11～13)

主の使が来てヨアシの子ギデオンに呼びかけられた時、彼はミデアン人の目を避けて酒ぶねの中で麦を打っていました。主の使は「大勇士よ、主はあなたと共におられます」と言いましたが、この言葉は、ギデオンにとっては何か悪い冗談か皮肉のように聞こえました。彼は、自分はマナセの内では一番小さい氏族であり、自分も弱く父の家でも若いものであることを、くどくどと言っています。そんな自分がなぜ「勇士」と呼ばれ、「あなたはあなたの力をもつて行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい」と言われるのか、彼は本当にとまどってしまいました。

二、臆病者を用いられる神(14)

しかし、このように全く臆病で消極的な人であったギデオンを、主の使はあくまでも「大勇士」と呼びます。

神の戦いは神の方法でなされ、神はご自身の栄光が現される方法を用いられます。神は、自信満々の人間、知恵と能力のある者や、自分の力を誇る者を用いられることはありません。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない者をあえて選び、召し、用いられるお方です。「これは権勢によら

ず、能力によらず、わたしの霊によるのである」(ゼカリヤ4・6)。弱く、小さく、力のない臆病者のギデオンこそ、イスラエルを救うための神の選びの器でした(Ⅰコリント1・26、31参照)。

私たちが、強気の言葉や態度とはうらはらに、本当の自分の姿を見せられ、無力感や不信、自己の醜さに打ちのめされることがあります。日本の教会もまことに小さく、力の無いものであることを思われます。異教や異端ばかりが跋扈し、この世の勢力や組織がすべてを支配しているかのような現実から、キリスト教会は隠れて存在し、かろうじて日々の生活と働きを継続しているように感じてしまうのです。私たちの祈りも信仰も臆病なものになっていないでしょうか。何か言われると、自分に能力がないこと、小さく弱いことを言い訳にしていないでしょうか。しかし、いつもそこに留まって、神のお言葉と召しに従わないことこそ、私たちの最大の問題なのです。今一度、本気で主を求め、全面降伏・全面信頼し、上からの新しい注ぎを受けるべきではないでしょうか。

三、臆病者を大勇士に変える神(14、16)

ギデオンを選び、救済者として召された神は、臆病者を

大勇士に変える力を持つておられます。主が選び、召し、共にいてくださり、つかわしてくださるのです。〈わたしがあなたと共にいる〉(わたしがあなたをつかわす)と主は繰り返し語られます。もし、そうならば、これに勝る力、勇氣、祝福はありません。

「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ(訳せば、ペテロ)と呼ぶことにする」(ヨハネ1・42)。直情的で不安定、欠点の多いシモンにイエスは目を留め、そのようなあなたをわたしは「ペテロ」(不動の大岩)とすると言われました。生まれつきのシモンと、後の大使徒ペテロとのギャップはとても大きなものです。しかし、その狭間を埋めて実質を持つ「ペテロ」としてくださるのは、イエス様なのです。

私たちも今日、主が共におられるという事実を受け入れ、主が、弱く臆しやうい私たちを造り変えて下さることを信じ、臆病者から勇士に変えられましょう。

結論

弱いところを強くされ、疑いを確信に変えて頂きましょう。大胆な信仰に立つて神に従い、神の方法によって圧倒的多数に対しても完全に勝利する者とされましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今週から、旧約聖書の士師(さばきづかさ)が取り上げられる。

テキスト

7 ミデアンびと アブラハムとケトラとの間に生まれた第4子(創世記25・2)。その後、この民族は聖書に度々登場するが(創37・25)、民数記22、25章)、一旦はモーセによって滅ぼされる(民数記31・1～20)。ミデアンびとの最大の特徴は、彼らのバアル礼拝である。

8 預言者 (ヘ)イーシュ・ナーヴィイ 直訳すると「預言者であるひとりの男性(人間)」。士師(さばきづかさ)の時代に預言者が登場することは珍しいことであり、士師記においてはイスラエルが主に呼ばわると、その時点で士師が遣わされる(3・9、15)。しかしここではその前段階として預言者が遣わされる。この預言者の任務はイスラエルの民にその罪を示すことと、彼らに悔い改めを命じることであった(10)。

11 主の使 この言葉は、旧約の神顕現けんげんの重要な個所によく用いられている言葉である(創世記16・7以下、22・

11、15、出エジプト3・2、民数記22・22、列王上19・7、イザヤ37・36、ゼカリヤ1・11～12他)。また士師においてもこの言葉はしばしば登場する(2・4、5・23、13章)。もちろんギデオンの物語だけでもしばしばみられる(11、12、21、22節)。これらの箇所を見ると、この主の使は神と人間の間を仲介する役割を果たしているのであろうと考えられるが、それが預言者的な役割であったか(ハガイ1・13)、それとも祭司的な役割であったか(ハガイ2・7)は明らかではない。この、主の使について、受肉前のイエス・キリストであると考ええる立場もある。ギデオンはこの使を、はじめ普通の人にとらえたが、この使が見えなくなってから、この方が主の使であることを知った(21、22)。**アビエゼルびとヨアシ** アビエゼルびとは、マナセの一氏族(15節。またヨシユア17・2参照)。アビエゼルとは「父(神)は助けである」という意味である。またヨアシは「ヤーウェは与えたもう」という意味である。**オフラ** エストラエロン平原の中部に位置する。**テレピンの木** 新改訳聖書では「樅の木」。伝統的に聖なる木であるとされ、神の託宣が与えられるとされる木であった(創世記18・1以下)。時に**ヨアシ**の

子ギデオンはミデアンびとの目を避けるために酒ぶねの中で麦を打っていた。ミデアン人は、イスラエル人が苦勞して栽培・収穫した農作物を狙って、その収穫期にイスラエルを襲った。そのミデアンの侵略から逃れるために、ギデオンは酒ぶねの中で小麦を打っていたようである。酒ぶねは、岩床に掘り起こされた穴で、ギデオンはその穴の中に隠れていた。

12 大勇士 (ヘ) ギッボール・ハイル) ギッボールもハイルとともに「勇者」という意味。そこで、「大勇士」となったのであろう。主はあなたと共におられます 主の臨在の約束。ヨシユアにも (ヨシユア1・5、9)、またアサ王にも (歴代下15・2) 臨んだ。

13 前節の主の使いの言葉に対するギデオンの反応は、当然のことのように思われる。主は彼らを見捨てたのではないか、また主の力あるわざは昔のものであって、現在のことではないのではないかという不満である。この不満は明らかに同時代の人々も抱いていた不満であろう。

14 あなたの力 主は「わたしの力」とはおっしゃらず、「(わたしが与えた) あなたの力」と仰せになった。主の力は既にギデオンに与えられていたのである。その上

で、主はギデオンを遣わそうとされたのである。同時に前節のギデオンの問いに対して主は **あなたは…救い出しなさい。わたしがあなたをつかわす** と語られた。前節の問いを解く鍵はギデオンにあるのである。同時にこの言葉は主の召命の確認の言葉でもある。

15 主よ 13節の「君よ」という呼びかけから明らかに変化している。「わたしの主よ」(新共同訳)。最も小さいもの 一番若い者、という意味。自分の家の地位の低さや年齢の若さなどによって主の申し出を断る姿はモーセ(出エジプト3・11、4・10)、サウル(サムエル上9・21)、エレミヤ(エレミヤ1・6) にも見られる。

16 わたしがあなたと共にいる 12節の主の臨在の約束の再確認。この言葉は、14節の言葉と共に、主が「派遣の主」であると同時に「臨在の主」であることを表す。この言葉はマタイ28・18・20にも約束されている言葉であり、古今東西を問わず主の弟子たちに与えられている、これ以上ない約束である。

参考図書 アーサー・E・カンダル、レオン・モリス共著「ティンデル聖書注解 士師記、ルツ記」(いのちのこ とば社) 他

聖書

士師6・7〜16

タイトル

弱虫なのに「大勇士」？

暗唱聖句

大勇士よ、主はあなたと共におられます。

士師6・12

目標

どんな人をも働きに用いようとしてくださる神の招きにお応えする。

導入

(和田 治)

「どうせ弱虫な僕なんて、私なんて、神様のお役にたてるような力なんかない、ダメな子さ」。皆さんの中に、そんなふうにいる人はいますか？ 実は、今日のお話でスポットが当たるのは、まさしく、「どうせばくなんて…」っと思っているタイプの人なんです。その名はギデオン。彼を見ると、神様は、弱い人をこそお用いになるのだ、っていうことがよくわかりますよ！

弱虫ギデオン

今読んだ聖書の箇所は「士師記」ですね。士師というのは「さばきつかさ」とも言って、人々を救うために神様がお用いになったリーダーです。十二人の士師のうち五番目に立てられたのがギデオンでした。当時、ミデヤン人は、

イスラエル人が苦勞して育てた農作物を狙って、襲いかかり、奪っていくのでした。そんなときギデオンは、敵であるミデアン人と戦って皆を守るどころか、彼らの目を避けて酒ぶねの中で、こそこそびくびく、麦を打っていたのです。うーん、怖がりで弱虫ですね。

そんなある日、主の使いが現れ、ギデオンに言いました。「大勇士よ、主はあなたと共におられます。イスラエルを救い出さない！」勇士っていうのは、勇気のある人という意味です。「大勇士？ イスラエルを救う？ とんでもない！ 無理です！ 私の家は、マナセ族の中でも一番弱いし、それに私は、家で一番年下なんです」。そんな自分になぜ「イスラエルを救い出さない」なんて言われるのか、ギデオンにはさっぱりわかりません。「はい！」と従うどころか、恐れてぶつぶつ文句を言うばかり…。

弱虫をお用いになる神様

「ギデオン…私を信頼せずぶやくばかりとは情けない。なんて弱虫だ。もうお前なんかには頼まない！」、主の使いはそうは言いませんでした。だって、主なる神様は、ギデオンの弱さをよく知っておられた上で、彼をお選びになったんですから。「あなたは、わたしが与えたあ

なたの力をもって行きなさい。わたしがあなたをつかわすのだ！」そうです、ギデオンの力ではなく、神様の力でこそ、イスラエルを救い出せるのですね。

「僕に任せてくれ！ 立派にやって見せる！」、「私なら大丈夫！ 自信があるの。神様の力なんかありません！」な～んていう自信満々の人間を、神様はお用いにはならないのです。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない人をあえて選び、お用いになるのです。

なぜって？ それはね、人は自分の弱さを知っていると、「神様、どうかお助け下さい！」って、神様に頼るでしょう!? それでこそ、神様はその人を自由に用いて、ご自身のわざを進めることができるのですね。やがて、ギデオンの軍隊は、ミデアン人に比べるとあまりにも数が少なかったのに、見事に敵をやっつけたのです。もちろん、神様の不思議な、そして大きな力によって！

恐れることはない！

ギデオンが恐れて尻込みしているとき、主は彼にこうおっしゃいました。「わたしはあなたと共にいる！ だから、あなたはひとりを撃つようにミデアンびとを撃つことができる！」ギデオンのように、私たちも、弱くて小さく

で、何もできないかもしれません。でも、忘れないで！ 私たちには神様がついてるんです。だから、恐れなくていいんですね。神様はどんな人でもそのお働きのために用いることができるお方なのです。

ペテロやパウロ、そして私たち

ギデオンのように、神様に用いられそうもないのに用いられた人たちは、他にもいましたよね。例えば、ペテロはイエス様から、ある時こう言われました。「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをペテロと呼ぶ」。シモンは「小石」という意味です。すぐにかつとしたり弱虫で、イエス様を裏切ってしまうようなペテロに、「小石のようなあなたを、わたしが『ペテロ（揺るがさない大きな岩）』とする」と仰りその通りになさいました。また、パウロもかつてはクリスチャンたちを捕えて牢屋に入れるような人だったのに、神様の力で全く変えられ、神様のために大いに用いられました。そうです！ 彼らと共におられた神様は、同じように私たちともいつも共におられ、私たちを強め、お用いくださるのです。だから恐れず、神様を信頼し、神様に自分を献げ、従いましょう！

♪雄々しくあれ♪（新聖歌486、ホ106、イン77他）

聖書 士師7・1～8 テーマ ギデオンの精銳

序論

(石田高保)

ギデオンの精銳三百人とはよく知られた故事であるが、改めて私たちへの励ましとチャレンジを見て取ることができる。私たちは何を誇りとし、信頼したらよいのか。

一、数を誇る

ミデアン、アマレクなどの民がイスラエルに侵略を挑んだとき、主の霊がギデオンに臨み、同朋に召集を呼び掛けたところ、彼のもとに3万2千人の兵士が自発的に集まってきた(6・33～35)。絶えず外敵に圧迫されていたイスラエルにおいては出来すぎと言ってもよい人数である。そもそも司令官であるギデオン自身が、かつてミデアン人に見つからないように酒ぶねの中で麦を打っていたような用心深い人物であった(6・11)。この人数で敵にあたるのは十分とは思われなかった。ところが出陣の朝、主がギデオンに思いがけないことを言われた。(「あなたと共にいる民はあまりに多い」、そして臆病な者を戦争に出さず家に帰らせよというもの。それは大軍で

敵を破れば、「おそろくイスラエルはわたしに向かつてみずから誇り、『わたしは自身の手で自分を救ったのだ』と言うであろう」という理由からである。そこでギデオンが「だれでも恐れおののく者は帰れ」とふれ回らせたところ、3分の2にあたる2万2千人が戦列を離れた。まさかギデオンは1万人しか残らないとは想定していなかっただろう。しかし主はさらに追い打ちをかけるように言われる、「民はまだ多い」と。戦いに勝つ秘訣はできるだけ兵を集めて数の上で敵を圧倒することである。それなのに神の戦略はその正反対である。

さらに、それで終わらず、主は要求される。(犬のなめるように舌をもって水をなめる者)、「ひざを折り、かがんで水を飲む者」は敵の奇襲に対して不用心である。しかし「手を口にあてて水をなめた者」はいつでも敵に立ち向かえるように臨戦態勢が整っている。だから後者の三百人だけを戦いに用いなさいと。つまり神は実戦部隊としてたったの3パーセントしか残さなかった。これはとうてい人間の戦略ではありえない。逆立ちしても勝てるわけではないのである。ほとんどの兵たちが家に帰ってゆくのを見、僅かに残った三百人を見てギデオンの心

のうちはどのようなであつたか想像に難くない。数に頼んで敵を圧倒しようとする戦略は放棄しなければならなかった。生きておられる主を仰ぐのみである。

二、主を誇る

私たちの人生は必ずしも自分の計画通りに進むとは限らない。相手のあることに至っては、ほとんどコントロール不能だろう。人を自分の思うとおりに変えたり動かしたりすることはできないからだ。人間の方法と神の方法とはずいぶん違う。「天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」(イザヤ55・9)とあるとおりであることを認めざるを得ない。しかし神と人とに仕えようとすれば、聖霊は私たちの能力や限界と常識をはるかに超えてか愛や知恵や力を注いでくださることを期待すべきである。

ギデオンとその精鋭三百人は主の助けによって並外れた戦闘を続け、ミデアン人を次々に破り、とうとう12万人を倒すに至る。単純計算で400倍の敵を破ったことになる(8・10)。神の介入なくしてあり得ない出来事である。この大勝利がイスラエルに及ぼした影響は小さくない。

まことの神と偶像との間でブレまくっていた彼らに、神の生きておられることが反論できない形で証明されたからである。神が私たちをとおして働かれるとき、人数の少ないことは問題ではないようである。「多くの人をもつて救うのも、少ない人をもつて救うのも、主にとつては、なんの妨げもない」(サムエル上14・6)。

ところが私たちクリスチャンは社会的少数者であることを過度に恥じているところがあるかもしれない。問題は多いか少ないかではなく、置かれている関係の中でいかにキリストを生きるかではないだろうか。自分の十字架を負う、つまり周りの人に自分を与えて行くとき、この世にはないキリストの命が流れる。そのとき周りの人が生かされ、私たちの内にキリストを見る。それは少数と言わず、一人でもできることである。

結論

なれている勉強であれ、仕事であれ、買い物であれ、運転であれ、奉仕であれ、人間関係であれ、主により頼まないでもできてしまうだろう。しかし時に失敗をしかし、主に信頼すべきことを改めて気づかされる。目に見えるものを誇るのではなく、主を誇ろう。

研究資料

(小平徳行)

ミデアンと戦う前に、神は兵卒の数を減らすよう命じ、そのために二度の試験をした。それは勝利は主によってもたらされることを明確にするためであった。

テキスト

1 エルバアル 「バアルに弁護させよ」の意(6・32)。

これはギデオンがバアルの敵であることを示す名であるが、同時に主のしもべであることを強調する榮譽ある名となった。彼と共にいたすべての民 ギデオンのもとに集まったのは、彼の故郷の町のアビエゼルびと、同族のマナセびと、そしてその北方にいる周辺の部族(アセル、ゼブルン、ナフタリ)の人々であった(6・34-35)。ハロデの泉 ギルボア山の北西麓にある泉で、パレスチナにおいて最も水量の多い泉の一つ。付近において軍事行動の行われる場合には特に重要視された。ハロデは「恐れ、震え」などの意味があり、3節の出来事がその名前の由来となっていると考えられる。モレの丘 ハロデの泉から北に8 km弱の距離。

2 あなたと共にいる民はあまりに多い 次節によればギ

デオンのもとに集まった民の数は3万2千人であり、敵のミデアン軍13万5千人と比べれば、四分の一以下であった。それでも主からご覧になれば、あまりに多かった。ゆえにわたしは…わたさない 敵に対する勝利は主がもたらすことを示している。おそらくイスラエルはわたしに向かつてみずから誇り、『わたしは自分の手で自分を救ったのだ』と言うであろう 兵士の数を減らす理由は、勝利が自分たちの力によってもたらされたことを勘違いし、自らを誇ることがないようにするためであった。主にとって大切なのは、ただご自身の民に勝利を与えるのではなく、民が高慢に陥らずに、その勝利の栄光がご自身に帰せられることであった。勝利の時こそ高慢に注意しなければいけない。このことは絶えず警告されてきたことである(申命記8・17)。主にあつては勝利を与えるために民の人数は関係ない(サムエル上14・6)。

3 『たれでも恐れおののく者は帰れ』 精兵卒を選ぶた

めの第一の試験は、恐れに関する事であった。主に信頼せず、臆する者は全体の士気に影響を及ぼすゆえ、除隊させられた。恐怖心は伝染する。主が必要とされるのは信仰に立った勇敢な者である。他の訳ではマソラ写本に基づい

て、この後に、「ギルアデ山から離れなさい」が続く。しかしギルアデはヨルダンの対岸にあり、ハロデの泉からは遠い。またイスラエルの陣営はギルボア山側にあることから、ギルボア山への言及と想定する人が多い。または「ギルアデ山を通過して」とも訳すことができるので、その場合は不自然ではない。

4〜6 民はまだ多い 主にとっては一人でも多かった。そこで第二の試験をする必要があった。それは注意深さを計るためのものである。水ぎわに下りなさい 試験の場は水ぎわであった。この地は乾燥しており、水は貴重であった。人間にとつて、のどの渇きを潤す欲求は強いいため、戦いを忘れて一刻も早く渇きを潤そうとする。その時にこそ、兵士としての姿勢を見極めることができる。試みよう この語は「精練」（金属から不純物を取り除き、純度の高いものにする）を意味する。つまりただ数を減らすだけでなく、精兵卒だけを残すためである。舌をもって水をなめる者はそれを別におきなさい：ひざを折り、かがんで水を飲む者もそうしなさい ひざをついて水を飲むとは、敵が不意に攻撃を仕掛けてきた場合すぐに対応できないため、兵士としては失格である。また、直接舌で水をな

めるためには、ひざをつくことに加えて、さらには、悪いものまで飲みこんでしまう危険があるという点でも失格となったかもしれない。手を口にあてて水をなめた者 ひざをつかずに、いつでも対応できるよう周りに注意を払いながら水を飲んでおり、どんなときでも戦いに備えている人々であった。

7 わたしは水をなめた三百人の者をもって、あなたがたを救い、ミデアびとをあなたの手にわたそう。 初めの3万2千人に比べると1%にも満たない数であるが。この三百人は、敵の大軍を見ても恐れおののかず、かつ用心深い兵士たちであった。戦いは極度の緊張と警戒を必要とする。臆病や、隙を見せることは敗北につながる。

8 つぼとラツパ 普通、全員にラツパを持たせることはしない。これらは後の奇襲攻撃（16〜18）に用いるためのものである。ここで「つぼ」と訳されている〔ツエダー〕は「糧食」の意味（新改訳、新共同訳参照。16節の「つぼ」には〔カド〕が用いられている）。恐らく、つぼに糧食を入れていたと考えられる。

参考図書 鍋谷堯爾「士師記」『新聖書註解・旧約2』（いのちのことば社）他。

聖書

士師7・1〜8

タイトル

「選り抜かれた戦士」らしく生きよう!

暗唱聖句

あなたと共にいる民はあまりに多い。

目標

士師7・2
恐れず、油断せず、御国の戦いのために
備える者となる。

導入

(和田 治)

みなさん、先週は誰のお話でした? そう、ギデオンでしたね。弱虫なのに神様の力によって強くされて、共におられる神様によって用いられたのでしたね。さて、今日はいよいよギデオンが率いるイスラエルの軍隊が、敵と戦う準備がなされる場面ですよ! どうなるのかな?

民はあまりに多い

主なる神様の霊に満たされて、ギデオンが呼びかけたところ、3万2千人の兵士が集まってきました。敵はミデアン人やアマレク人たちがものすごくたくさん、少なくとも12万人以上はいたのです。「うーん、ぜんぜん足りないなあ!」。そう思っているギデオンに、神様がびっくりするようなことをおっしゃいました。「あなたと共にいる民は

あまりに多い。『主の力ではなく自分たちの力で勝った!』と高ぶるに違いない。『だれでも恐れている者は帰りなさい』と言え。『え? 大丈夫かな...』と思いつつもギデオンはおっしゃる通りにしました。あれれ? 2万2千人も「実は恐ろしいんだよね...」と、戦いを捨てて帰ってしまいました。残りはたった1万人...。でもね、神様はギデオンがもつとびっくりするようなことをおっしゃったんです。「まだ多すぎるぞ! 全員を泉に連れて下れ。あなたと共に戦うべき者が誰かを示そう」。

選り抜かれた戦士

戸惑いながらもギデオンは、皆を水辺に集めました。すると神様の声です。「犬のように舌で水をなめる者や、膝を折ってかがんで水を飲む者は、別にしておきなさい」。

いつ敵が襲ってきてもすぐに立ち向かえるように、油断せず水を手ですくって飲む人たち...。その人数はたった3百人だけでした。ほかの者はみな、かがんで口を水につけたり、犬のように舌で水を飲んだのです。

神様はきっぱり言われました。「わたしは、最初の組の3百人でミデアン人を征服しよう。残りはみな家へ帰らせるがよい」。かがみこんでごくごく水を飲んでみると、敵

がそつと近づいてきても気付きにくいですよ。油断してしまっているそんな兵士たちは帰されたのです。

がーん！「た、た、たったの3百人……」ほとんどの兵たちが家に帰ってゆくのを、ギデオンはどんなに心細かったでしょうか……。でも、その3百人でなんと、12万人の敵に勝ってしまったのです！もちろん、神様の不思議な方法で、敵が同士討ちになったのです。

この大勝利でイスラエルの人たちの信仰は一気に強められました！主なる神様か、偶像の神か、どっちがほんものか、分からなくなっていた人々に、主なる神様が確かに生きておられることがはっきり示されたのですから。ハレルヤ！「多くの人をもつて救うのも、少ない人をもつて救うのも、主にとっては、なんの妨げもない」（サムエル上14・6）とある通りですね！

わたしたちも選抜かれた戦士？

「敵を恐れないし、油断もすきもないし、さすが3百人は選抜された戦士だ。わたしとは大違い！」そう思っているあなた、ブッブー！それは勘違いですよ！あなたは「神様が共におられるから大丈夫！」と信じているのでしょうか？そして、本当の敵は悪魔で、決して油断しちゃい

けないってことも知ってるよね？その悪魔に自分の力では勝てない、でも、油断しないで聖霊によって戦うなら勝てる、って信じてるよね？教会学校でみ言葉を蓄えてきた皆さんは、全員、「選抜された戦士」、つまり、ギデオンと共に戦った3百人と同じなんですよ！

人数が少なくても

12万人を倒した3百人は、400倍の敵を破ったことになりますよね！神様が助けて下さったら、こんな風に勝利できるのです。皆さんは、教会学校のお友達は少ないしな……」「日本には、クリスチャンは百人に1人くらいしかないし、少なすぎてどうしようもないよ」って思ってませんか？いいえ！選抜された戦士である私たちが、本気で神様に頼って悪魔に立ち向かうなら、神様が勝利を与えて下さり、私たちを通して、一人、また一人と、イエス様を信じる人が起こされてくるのですよ！さあ、恐れないで信じて従おう！聖霊の油に満たされて！

♪涙とともに聖戦をふれよう

（プレイズ&ワーシップ合本楽譜集Ⅰ 113～114）

聖書 士師16・4〜6、15〜22 テーマ サムソン

序論

(石田高保)

反面教師とか他山の石という言葉があるが、サムソンはさしずめクリスチャンにとってそういう存在だろう。彼の生きた時代、イスラエルはペリシテの侵略を受け始めたが、それに対してほとんど抵抗を示さず、その支配を甘んじて受けていた。そこで神はペリシテに断固抵抗する指導者を起こそうとされた。彼の生まれる前、両親に主の使が現れ、これから生まれる子はペリシテからイスラエルを救い出す者となると預言した(13・5)。やがて成長したある日、彼に主の霊が降り、並はずれた力でペリシテ人を圧迫するようになり、20年にわたってイスラエルのさばきびと・士師として活躍した(31)。

一、力任せによる失敗

彼の前半生は、まさに怖いものなしであった。若い頃、主の霊が臨み、並はずれた力を授かった。彼はそれをペリシテ人を一人でも多く殺害することに用いた。

ある時からサムソンはデリラというペリシテの女を愛

してその家にとどまっていた。それを知ったペリシテの君たちは高額な報奨金を提示してデリラからサムソンの弱点を聞き出そうとした。サムソンは三度も煙に巻こうとしたが、毎日せがまれるうちに苦しくなり、ついに本当のことを言ってしまう。(もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去って弱くなり、他の人のようになるでしょう)。というのも彼はナジル人として生涯髪の毛をそらないという誓願を立てていたからである。そこでデリラは人を呼んでサムソンの髪の毛をそり落とさせたところ、神の霊による怪力は彼を去ってしまう。怖いものなしで行動してきた結果を刈り取ったのだらう。

主を受け入れた人は誰でも聖霊の賜物をいただいていてそれに優劣はないが、それは神と人によりよく仕えるために用いられるべきものである。得意な奉仕の分野だからといって、自分を喜ばせようとして、力任せに行うなら、周りの人との関係を損なったり、後味の悪いものになったりするかもしれない。自分の能力や知識に頼るのではなく、聖霊に満たされることを求めつつ、謙遜に奉仕したいものである。

二、悔い改めによる回復

ついにサムソンはペリシテの手に陥り、両眼をえぐられ、獄屋の中でうすを引かされることになる。彼の生涯で初めて経験する挫折である。彼は人生のどん底で考えただろう。なぜここまで落ちてしまったのか、自分の何がいかなかったのかと。本質的なことは力の源である髪の毛を切られたこと、突きつめれば神との関係をなおざりにしていたことだと思いがたつた。そこで彼は深く悔い改め、神との関係を回復したと思われる。

時を同じくして髪の毛も再び伸び始め、かつての千人力が全身にみなぎるのを感じた。反攻反撃のときが訪れたのである。おりしもダゴンの祭りで大勢のペリシテ人の前に余興に出されたサムソンは、彼らを倒す好機と見て祈った。「ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテびとにあだを報いさせてください」と祈ってダゴンの神殿の石柱を押し倒すと神殿は崩壊し、サムソンは三千人のペリシテ人を道連れにした。「サムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった」と、その士師としての功績がたたえられている。

彼の生涯には神への不従順が目につくが、まいたものを刈り取る中で不従順を悔い改め、神との交わりを回復している。このようにどれほど芳しくない行状であつても、ひとたび悔い改めるならば、神はただちに完全に赦し、何事もなかったものとして下さる。あまりにひどい罪を犯してしまつたので、神に赦していただけないのではないかと思うことがあつても、十字架による完全な赦しを信じて悔い改めよう。それとともに神が赦して下さつた自分を赦すことも忘れないようにしたい。

彼はおおむね神に不従順な人生を送つたにもかかわらず、新約聖書では信仰の勇者としてたたえられている(ヘブル11・32)。新約の倫理観から見れば、彼の行状には理解に苦しむところが少なくない。それでも彼はイスラエルをペリシテの侵略から救い始めた英雄であり、神に選ばれた器であることは否定できない。

結論

何度同じ過ちを犯したからといって神の選びは変わらず、神に見捨てられることもなく、赦しの道は常に用意されている。しかしそれに甘んじることなく、神とのコミュニケーションを大切にしてゆこう。

研究資料

(宮澤清志)

先週までのギデオンに引き続いて、今週は「サムソン」である。サムソンもギデオン同様士師の中では最も知られている人物の一人である。

テキスト

4〜5 デリラ 「思わせぶりをする」という意味の名。ペリシテ人であった。しかし、この名の由来だけを見てデリラに対する偏見を抱くのは早計である。なぜなら今回のサムソンとデリラの物語の背後には、当時その地方に勢力を持っていたペリシテの君たちの策略があったからである(後述)。**ペリシテびとの君たち** ペリシテ人には5人の領主がいた(サムエル上6・4)と考えられるから、ここでも5人いたのであろう。すると、デリラへの報酬としてのおの銀一〇〇枚とすると、全部で五五〇〇枚ということになる。この学を今日の貨幣価値に換算すると、注解者によつて多少の幅はあるものの、おおよそ250〜300万円くらいの額とされている。かなりの高額である。**説きすすめて** 「言いくるめて」(新共同訳)。この言葉にペリシテの領主たちの策略がうかがえる。

15〜22 サムソンがその力の秘密を打ち明けた経緯が記されている。

15 **あなたの心がわたしを離れている** 直訳すると「あなたの心はわたしとともにない」となる。これまでのデリラの言葉(10、13)とは明らかに異なる言葉。デリラの焦りと怒りが透けて見える。**三度も** 一度目(7〜9)、二度目(10〜12)、三度目(13〜14)。

16 **毎日** どのくらいの日数が経過したかは明らかではないが、かなりの日数が経過したと考えられる。その間、毎日前節の殺し文句をもつて責め立てられたサムソンは、死ぬほど悩んだ。

17 ここに人間の弱さを見ることが出来る。サムソンは既に同じ過ちをタイムナの女の一件でもしていた(士師14・16〜18)。この時も、サムソンは思わずその秘密を打ち明けてしまったのである。前の過ちを繰り返さないように注意していても、同じ過ちを繰り返してしまったのである。**ナジルびと** 「聖別された者」という意味を持つ。イスラエル人の中で、特別な宗教儀式(誓願^{せいがん})を守つて献身し、ヤハウエに対する信仰を表明した人々を指す。それは一時的献身の場合もあれば、生涯にわたる献身の

場合もある。サムソンは後者である。具体的な守るべき律法は、民数記6章に記述されている。**かみそりを当てたことがありません** ナジル人が守るべき律法の一つ。古代において「毛髪」は不思議な力の宿るところとされた。毛髪の成長力と関連があるのかも知れない。髪を失うことは、力の喪失を意味していた。しかし、サムソンの力の源が毛髪にあるのではないことはいままでもない。また彼の肉体にあるのではない。彼がその毛髪を剃ることを許したことは、彼がナジル人としての誓願を破り、神との関係を絶つたことになるのである。その結果、主はサムソンを離れた(20)。**ほかの人** 直訳は「人間(アダム)のひとり」。

18 デリラは、サムソンが今度こそ真実を打ち明けたことを直感によって知ったのであろう。彼女はペリシテの領主たちの上ってくるようにと呼んだ。そのとき領主たちは銀をもつて上ってきた。すなわちデリラとペリシテの領主たちとの間で約束されていた銀一一〇〇枚のことであろう(5)。

19 **彼を苦しめ始めた** サムソンが寝ている間に両手を縛り、7房に分けてあった髪をことごとく切り落とした

後に、侮辱し始めたのであろう。

20 **彼は主が自分を去られたことを知らなかった** 民数記14・42以下、ヨシユア7・12(アカン)、サムエル上16・14、18・12、28・15(以上サウル)等、この言葉はしばしば登場するが、非常に厳しい言葉である。ここにおいても、サムソンの力の源がその毛髪にあるのではなく、臨在される主ご自身にあることが明示される。

21 **両眼をえぐり** サムソンを捕らえたペリシテ人たちは、即座に彼を殺すのではなく、まずなぶりものにして楽しむという意図がうかがえる。**ガザ** 地中海沿岸にある、ペリシテの5つの都市国家の一つ。**うすをひいて** 通常奴隷のする仕事であり、やはりサムソンをなぶりものにしようという意図がある。

22 **その髪の毛はそり落された後、ふたたび伸び始めた** この間の時間の経過がどれくらいであるか分からないが、この間は、サムソンにとっては悔い改めと神との交わりと回復の時として必要な時間であった。この後続くペリシテとの最終決戦(23―31)の背景には、この期間の主との交わりの回復が必須であった。

参考図書 4月19日分と同じ。

聖書

士師16・4〜6、15〜22

タイトル

あなたも私もナジルびと

暗唱聖句

わたしは生れた時から神にささげられた

ナジルびとだからです。

士師16・17

目標

罪から聖別されて、力強い信仰者生涯を送る。

導入

(和田 治)

先週まで二回続けて学んだ士師のお名前を覚えてますか？ そう、ギデオンでしたね。今日一緒に学ぶのは、十二人の士師の最後の一人、「サムソン」。その力は、ペリシテ人の町の門を二本の柱ごと引き抜いて、高い山の上まで運んだほどでした！ またある時は、ロバのあごの骨一つで、一千人ものペリシテ人を倒したのです。世界一の力持ち、サムソンはどんな一生を送ったのかな？

ナジルびと、サムソン

みなさん、「ナジルびと」とっていうのはね、神様のものとして聖く生きるように選ばれた人のことです。「生まれた時から神にささげられたナジル人」だったサムソンは、御使いに命じられ、一切ぶどう酒を飲まず、髪の毛

を剃り落すことをしませんでした。その長い髪の毛は、神様がサムソンに、ものすごい力をお与えになっているしるしでもありました。その頃、イスラエルの民はペリシテ人から苦しめられていました。サムソンは神様の霊の力によって、ペリシテ人を次々と倒していきましました。ところがサムソンの気持ちは、まっすぐ神様に向くのではなく、なんと、女の人の方に向いていたのです。

ばらしちゃダメなのに……！

ある時、サムソンはデリラという女の人に恋をしました。それを知ったペリシテ人たちが、デリラに言いました。「やつは俺たちの敵だ。その力の秘密を探れ。どうしたら鎖で縛り上げることができるか、ぜひ知りたいのだ。お礼のお金はたんまり用意しているぜ」。

デリラは早速、サムソンにおねだりします。「ねえあなた、どうしてそんなに強いのか？ 私に教えてちょうだい」。でも、サムソンはデリラに本当のことを言いませんでした。秘密をばらしてしまえば、神様に背くことになるからです。三度、デリラからねだられましたが、だまして秘密を守り通しました。でも、デリラはあきらめません。「サムソン！ 今度こそ力の秘密を教えてください

うだい！」毎日毎日、デリラはサムソンにしつこく願ひ続けました。ついに根負けした彼は、デリラに秘密をばらしてしまったのです。「実は、わたしの頭にはかみそりを当てたことがないんだ。それが力の秘密さ。生まれた時から神にささげられたナジルびとだからね」。

悔い改めたサムソン

さあ、大変！ デリラの知らせを受けたペリシテ人たちは、サムソンを捕まえにやってきました。デリラはサムソンをぐつすり眠らせ、人を呼んで髪の毛を剃らせてしまったのです！ 「サムソン、あなたを襲いにペリシテびとが来たわよ！」なかに、いつもの調子で片づけてやる！」彼は、神様とのお約束を破ったために、神様の聖い力が自分から去ったことに気づいていなかったのです。神様がご一緒ではなくなったサムソンはペリシテ人に捕えられ、両目をえぐり出されました。そして、牢獄の中で鎖につながれて、白をひかされたのです。

その牢獄は、サムソンにとって、悔い改めの場所になりました。ナジル人なのに聖い生き方から大きく脱線してしまったこと、神様との大切なお約束を破ったこと…。神様は悔い改めたサムソンに、もう一度力を注いでくだ

さいました。頭の毛がだんだん伸びていったのです。ペリシテ人の神、ダゴンの祭りに引き出されたサムソンは、劇場の柱を抱えて、神様に祈りながら身をかがめました。すると建物が崩れ、その下敷きで、たくさんの方を倒しながら、彼も死んでいったのです。神様に背く大勢の人々が、サムソンによって倒されました！

私たちもナジル人

みなさん、実は私たちもサムソンのように、神様のものとして聖く生きるように選ばれたナジル人なんです！ だって、イエス様の十字架の血によって罪を赦され、聖くされたんですもの。皆さんは、神様から与えられた力や知恵や時間やお金などを、何のために使っていますか？ ナジル人らしく、神様のためにこそ喜んで使おうではありませんか。今日、もう一度心から神様のもとに帰って、「神様、僕は、私はあなたのものです。聖くして神様のために用いて下さい。喜んでお献げします」と祈りましょう！ 聖く歩む力、神様と人を愛する力を求めましょう。神様は必ずお与え下さいます！

♪今こそキリストの愛に应えて♪(詩・曲 田中英昭)

※教会教育室HPで楽譜をダウンロードできます。

聖書 サムエル上1・1～20 テーマ 神のみわざの始まり

序論

(福井文彦)

サムエルは、士師として最後の人物であり、また預言者としては最初の人物です。彼はモーセとダビデの間のイスラエルの歴史において最も偉大な人物と考えられています。そのサムエルの誕生に際しては、悪い時代に染まることのなかった母ハンナの神への絶対信頼と祈りがあったのです。

一、ハンナの苦しみ

エフライムの山地のラマタイム・ゾビムに住むエルカナには、ハンナとペニンナという二人の妻がありました。エルカナがどうして二人の妻を持つようになったのかは聖書に記されていません。最初の妻のハンナに子どもがなかったことが原因のようです。その結果、ハンナは非常に苦しみと悲しみを経験する日々となりました。

ペニンナは最初こそ第二夫人として控えていました。ところが、子どもを宿し授けられると、子どもがいないハンナを見下し、軽蔑し、優越感をもってハンナを苦しめ

るようになりました。

エルカナ一家は、悪い時代の潮流に流されず、毎年シロの聖所への巡礼を欠かさない敬虔な家族でした。そこで犠牲をさげた後、感謝と和解のいけにえを食べたのです。エルカナがいけにえを分けるのですが、その大部分がペニンナの側の家族に与えられました。というのは、ハンナには子どもがいらないので自らの分しか与えられなかったからです。その時は、ハンナにとって最も厳しい試練の時でした。というのは、ペニンナがこの機会を利用し、ハンナの弱みにつけ込んで悩ませ続け、神を恨ませようとさえしたからです。

二、ハンナの祈り

ハンナは余りの悲しみと苦しみのために〈泣いて食べることもしなかった〉のです。そのハンナに対してエルカナは〈わたしはあなたにとって十人の子どもよりもまさっているではないか〉と言って、愛と優しさをもって慰めました。しかし、それでもハンナのたましいに刻まれた大きな傷は、いやされることはありませんでした。

その時、ハンナは主に心を向け、〈主に祈って、はげしく泣いた〉のです。確かに主が胎を閉じられたことが、

悲しみと苦しみの始まりです。しかしハンナは、人間の力や知恵、経験でどうすることもできない状況に追い込まれた時、神とみ言葉に正面から向きあったのです。

ハンナには子どもがないことが苦しみでした。しかし、祈り求めているうちに、自分の求めが吟味され、子どもが与えられることの意味が変えられたのです。与えられた子どもは一生の間主に仕えるために主にささげる、というものでした。これはナジル人としての誓願です。

ハンナは心のうちで主に物を言い、祈りに祈り、祈り拔きました。ところが祭司エリはハンナの祈りを誤解します。彼女が酒に酔っていると思ったのです。そこで「いつまで酔っているのか。酔いをさまじなさい」と命じました。そこでハンナの控えめな説明を聞き、事情を知ったエリはハンナの願いが聞かれるようにと祝福を祈ったのです。

三、ハンナの純真な信仰

祈りに祈り、祈り抜いた結果、「食事し、その顔は、もはや悲しげではなくなった」のです。このことは彼女の純真な信仰をあかしし、またその重荷を主にゆだねたこととあかしです。ハンナは自分の願いが実現する前にす

でに子どもが与えられると確信し、信仰によって子どもをささげる決心をしたのです。

ハンナは祈りの中で条件をつけず明け渡しました。その結果、ハンナは、「…がありさえすれば」から「…がなくとも」の信仰に変えられたのです。すなわち、神への信仰、絶対信頼の信仰（ヘブル11・6）です。神はハンナの祈りと信仰を覚えて、顧み、男の子を与えられました。

ハンナはその子をサムエル（神の名・神に求めた者）と名づけました。ハンナは喜びのあまり、主に誓ったことを忘れるような不信仰な者ではありませんでした。祈りの中で誓った通り、乳離れした幼いサムエルを、主の宮に連れて行き、そこで一生神に仕える者として、ささげたのです。

結論

サムエルの母、ハンナは子どもが与えられないため、非常な苦しみと悲しみの中を通りました。しかし、そのような状況の中にあっても、神を信じ、祈り、神のみわざがなされました。私たちもハンナの信仰と祈りに倣う者となりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 エフライム もともとは地域の名で「実り豊かな地」という意味を持っていたようである。ラマタイム・ゾビム この町の名はここにしか出てこない。

2 ふたりの妻 当時は族長時代と同じく、一夫多妻という制度は何の問題もなく前提されていたし、律法もそれを認めていた(申命記21・15)。しかし、神の本来の御計画は、生涯を通じて一人の夫が一人の妻をもつことである(マタイ19・8〜9)と、イエスは言う。聖書において、このような重婚の場面では、それに伴う困難もあわせて描かれていることがしばしばである。ハンナ「いつくしみ」という意味の名。

3 シロ 会見の幕屋があった場所(ヨシユア18・1、士師18・31)。また3・3では、このころ契約の箱もこの地に移されていた。年ごとに、主に犠牲をささげるのを常とした エルカナ一家は、毎年シロの聖所への巡礼を欠かさない敬虔な一家であったようである。ホフニとピネハス 2・12以下参照。ここではその伏線。またエ

ルカナの家庭とエリの家庭との比較をする上でも3節後半の黙想は欠かせない。万軍の主 旧約聖書では、ここで初めて用いられている、神を描く際の重要な表現。この句は様々に説明されてきた。「万軍」の主とは、大いなる創造神に属するものであり、太陽、月、星、また天使や人間をも支配する支配者である。この言葉は、神の権能と栄光を表す称号となった。

4〜5 ただ一つの分け前 犠牲を献げた後の家族の祝いにおいては、感謝のいけにえや和解のいけにえは食べることができた(レビ7・11〜18)。エルカナはこのいけにえをとりわけ、自らの家族に分け前として与えるのである。ペニンナとその子たちにも分け前として与えられる。しかし、ハンナには子がいないので自らの分しか与えられないのである。

古代イスラエルでは、子どものいない妻は何かの神の不興を買っていると考えられた(「アブラハムとサラ」、「ヤコブとその妻たち」、「ザカリヤとエリサベツ」の物語など参照)。

9 段落が変わっているの、ここからの物語がサムエル誕生の前年のことであろうと考えることもできるが、

前節からのつながりから考えて、7節後半からがサムエル誕生の前年の出来事であるという見方もある。**飲み食**いした 4節以降の情景を参照。エリ 「神は高くあげられる」という意味の短縮名。シロの祭司。

11 **誓いを立てて** いわゆるナジル人としての誓願を指す。ナジル人については前週分のサムソンの物語の研究資料を参照していただきたい。

13 **酔っているのだ** 祭司エリがこのように思ったことの背景として、古代イスラエル人の祈りが、本来は神の前で叫び求める祈りであったこと（詩篇18・6、77・1など）が背景として考えられる。当時、黙祷は非常に珍しかったようである。実際、ハンナは悲しみのあまり声も出なかったのかもしれない。また当時、巡礼の祝宴で、このような酔態は珍しくなかったようである（イザヤ28・7、士師9・27など）。

15 **主の前に心を注ぎだしていた** この表現は、灌祭（注ぎのささげ物）に用いられる表現である（出エジプト29・40）。灌祭は、祭壇の上にささぐべきものとされており、ハンナはこの祈りの場を祈りの祭壇ととらえていたのかもしれない。

16 **悪い女** 多くの訳語がある言葉である。「よこしまな女」（新改訳）、「墮落した女」（新共同訳）、「ベリアル」の娘」（ベリアルとは、無価値、邪悪な、という意味の言葉であり、後に悪魔という意味に転化されている）など。

17 エリの祝福の宣言であり、またとりなしの祈りでもある。祝福には力があり、また有効なものであると信じられていた（創世記27章）。

18 **食事し** 「ハンナは泣いて食べることもしなかった」（7）との対比に注目。外見的には彼女の状況は何ら変わってはいなかったが、今や彼女は喜びにあふれていた。主が彼女の祈りを聞いて下さったという確信と、祭司を通して与えられた主の祝福の結果であろう。

19 **知り** 知的に知るという意味ではなく、人格的に知るといふ、より深い意味を持つ。

20 **サムエル** 「その（神の）名はエル」という意味を持つ。すなわち彼の本性、その人格はエルであるということである。彼女が祈った神の力を指したものである。祈りを聞かれる神について彼女がなした証しであろう。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解 サムエル記』（いのちのことば社）他

聖書

サムエル上1:1-20

タイトル

神のみわざの始まり

暗唱聖句

安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとけられるように。

目標

サムエル上1:17
苦しみの中にあつても神が働かれることを信じ、神に祈るものとなる。

導入

(水野晶子)

今日は母の日です。皆さんのお母さんはどんなお母さんですか? 「優しい」「強い」「明るい」「時々こわい」でも、なんといつても一番心配してくださっているのはお母さんです。お母さんに心から感謝しましょう。

今日は、イスラエルの人々の信仰が自分勝手になつていった時代に、ハンナさんというお母さんの真剣な祈りによって、すばらしい神様のみわざが始まったお話です。

いじめられて

イスラエルの国にエルカナという人がいました。ハンナとペニンナの二人の奥さんがいて、毎年シロにある神殿に行つて、礼拝をささげました。ハンナには子供がいません。ペニ

ンナには二人の子供がいました。一年に一度、家族そろつて神殿に行きますが、この時はハンナにとつてつらく悲しい時です。礼拝の後にみんなで食事をするのですが、子供たちの分までペニンナは取り分けてもらえます。しかしハンナはいつも一人分だけです。子供がいけないことに対して、ペニンナは意地悪く「ハンナは神様から祝福されていないのよ。」「子供が生まれないって、神様に嫌われていることじゃない。」と毎年毎年、ハンナをあざけり、笑いものにしました。ハンナは悲しくて泣いてばかりいて、食事ものを通ることができません。どんなに夫のエルカナが慰めても心は晴れません。

ハンナの正直な祈り

ある日ハンナは立ち上がって、神殿に行きました。神様の前で、泣き続けました。心にある悲しみを口に出すこともできず、心の中で祈り続けました。子供が与えられないつらさ、ペニンナからいじめられること、なんでも正直に祈りました。神様だけは自分の本当の苦しみをわかってくださることを信じて祈りました。「子供を与えてください」と一生懸命祈りました。ハンナが心注ぎだして祈るうちに「子供が与えられたら、その子は一生、神様にささげます」という祈りに変わっていききました。ハンナは神様が世界と

5月

10日 礼拝メッセージ例

私たち人間を造られたお方なので、必ず悲しみに目を止めてくださると信じて祈りました。

神殿にいた祭司エリは、長い間、ハンナの口が動くだけなので、ハンナが酒に酔っているのではないかと思って、「いつまで酔っぱらっているのか」と叱りました。ハンナは神様に心の悩みをそのままお話ししていたことを説明するとエリはわかって、「ハンナの願いを神様がかなえてくださるよう」と言ってくださいました。ハンナは神様に何もかも打ち明け、神様が祈りを聞いてくださると信じて心が晴れ晴れして帰って行きました。

祈りにこたえて

やがて神様は、祈りにこたえて、ハンナに男の子を与えてくださいました。サムエル（神の名・神に求める）と名付けました。神様に約束したようにナジル人として育て、三歳になったときシロの神殿に行って、サムエルを神様におさげしました。小さい時からサムエルはエリのお手伝いをして神様に仕えました。ハンナはサムエルのために生涯、祈り続けました。

母の祈り

キユククリッヒという男の子がいました。お父さんとお

母さん、四人のお兄さんがいるとても幸せな家庭でした。ところが大好きなお母さんが死んでしまったのです。キユククリッヒは悲しくて毎日泣いていました。家族みなさびしかったのです。お父さんが再婚することになりました。新しいお母さんが来たのです。しかし、誰も新しいお母さんを受け入れることができません。一番上のお兄さんは「ぼくはお母さんだと思わない。いじめてやる」と兄弟みんながお母さんにつらくあたりました。ある日、キユククリッヒがお母さんに用事があって家中を捜しました。お母さんはゲッセマネの園で祈るイエス様の絵の下で涙を流して祈っていました。「天のお父様、ジャックを守ってください」。一番上のお兄さんのために祈っていたのです。その祈りを聞いたキユククリッヒは「お母さんにいじわるしてごめんなさい」と泣いて祈ったのです。その時から家庭に平和と喜びがもどりました。

私たちも悲しい時、苦しい時、神様は必ず祈りを聞いて、助けてくださることを信じて祈り続けましょう。

♪ いっしょにうたおう（気持ちが悪くなったなら）♪

（PW 30）

聖書 サムエル上3・1～14 テーマ 神の御声を聞く

序論

(福井文彦)

サムエルはモーセ以後に出た最初の大預言者であり最後の士師です。彼が仕えていた祭司エリは老齢のために指導力と霊的な鋭さを失い、彼に代わる後継者として、神の目はサムエルに向けられていました。そのため、神は経験もないサムエルに語られます。その結果、サムエルは「神を知り」、預言者としての一步を踏み出すのです。

一、神に仕えたサムエル

ハンナには子どもがなかったが、その信仰と切実な祈りによってサムエルが与えられました。彼女は主に誓ったように乳離れした幼いサムエルをシロの聖所、エリのもとに連れて来て主にささげたのです(1・26～28)。

それ以来、〈わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えて〉いました。〈わらべ〉とありますが、必ずしも年齢的な「幼な子」ことではなく、歴史家ヨセフスは、サムエルは12歳を過ぎていたと言っています。ところがサムエルが育ち仕えた時代、エリ家を中心とする荒れ屋さんだ

状況で、人の目をくらませ、神への思いを失わせていました。すなわち、霊的に枯渇していたのです。そのことを、〈そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった〉と述べています。

しかし、サムエルは夜、熟睡している時でも、間違いはしましたが、エリが呼んでいると思えば、直ぐ起きてエリの所に飛んで行きました。その姿からもわかるように、サムエルは熱心に喜びをもって神に仕えていたのです。このサムエルに神はお心をとめられたのです。

二、神の声を聞いたサムエル

〈神のともしびはまだ消えず〉とありますから、夜明け前の頃のことです。エリは〈目がかすんで、見る事ができなくなり、そのとき自分の部屋で寝ていた〉のです。そのためサムエルは、〈神の箱のある主の神殿に寝て〉いました。

すると、主は〈サムエルよ、サムエルよ〉と呼ばれたのです。彼はてっきりエリに呼ばれたのだと思い、〈はい、ここにおります〉と言って、起きてエリの所に走って行きました。そして、〈あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります〉と告げたのです。ところが

エリは「わたしは呼ばない。帰って寝なさい」と彼に答えました。そこでサムエルは帰って寝ます。このようなことが二度、三度続きました。

なぜサムエルは、直接主が彼に語りかけておられるのに気がつかなかったのでしょうか。それは「主を知らず」にいたからです。サムエルの知っていた神は、日常のしきたりによって礼拝される神、エリを通して知る神でした。つまり、「主を知る」と「主について知る」とは別なことです。「主を知る」ということは、み言葉によって、人格的、主観的な関係により、個人的に深く知るということです。その意味でサムエルは主を知らなかったのです。

三度もサムエルがエリの所に来た時、老人のエリは、ようやく主がサムエルに語っておられるのだと悟りました。それで、再び呼ばれた時は、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言いなさい」とサムエルに教えたのです。

四度目も主は以前と同じようにそばに立たれ、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれました。サムエルはすぐに「へしもべは聞きます。お話しください」と答えました。

こうして、サムエルは生まれて初めて神の声を、神の声として聞きました。その内容は神の人、エリの家への恐ろしい預言、想像を超えた厳しい宣告でした(11-14)。エリの家ぶらの咎は、いけにえによっても、穀物のささげものによっても、いかなる犠牲によっても永遠に償うことのできないものでした。

サムエルはのち、主の言葉によって現れた神を知っている者として、神の声を聞き、また神の言葉を語る預言者として、イスラエルの歴史の中で非常に大切な人物となっていたのです。

結論

私たちの信仰生涯の中で、「神の声を聞く」ことほど大切なことはありません。神は今も、サムエルのように、神の声を聞こうとする心備えのある人を求めています。

神の声を聞き続けるためには、神との交わりを持つことが基本です。そして祈りの内に神の声を聞きましょう。聖書を読んで、黙想し神の声を聞きましょう。人の声ではなく神の声を聞いて、サムエルのように自分を神にささげて従いましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 わらべ 子(1・22)、幼な子(2・11)、など同じ言葉。しかし、必ずしも年齢的な「幼な子」と考える必要はない。この言葉はいわゆる「若者」というニュアンスも持つており、どちらかといえば「未熟さ」を表す言葉であろう。なお、ヨセフォスという歴史家は、当時サムエルは既に12歳を過ぎていたと記録している。**主の言葉はまれで** エリとその息子の時代の霊的低迷を反映している言葉かもしれない。また、過去の士師の時代とこれからの預言者たちの活動の時代とを分ける意味の言葉であるのかもしれない。

2 **目がかすんで** エリ自身の高齢であることを示すと同時に、前週物語よりかなりの時間の経過を示す言葉でもある。同時に4章以下の伏線ともなっている。エリの霊的な意味での「目のかすみ」を示す言葉である。またこのことが、サムエルが「聖所」に泊まってその務めを果たしていた理由とも考えられる。

3 **神のともしび** 出エジプト25・31〜40に描かれてい

る、7つの枝のある燭台ではないかといわれている。この燭台は、神の契約の箱が入られている至聖所の外の聖所におかれていた。**まだ消えず** 夜明け前の頃のことであろう(レビ24・3)。**神の箱** 神の臨在の象徴とされた箱。中には契約の石板(十戒)が納められており、「契約の箱」と呼ばれる場合も多い。ヨルダン渡河ではこの箱を先頭にして祭司が立ち(ヨシヤ3・13)、カナン入国後はシロの神殿に安置された。4章ではペリシテの戦いでこの箱が戦場に出陣してペリシテに奪われてしまうのだが(4・11)、後には返還されてキリアテ・ヤリムに安置される(7・1)。最終的にはダビデがエルサレムに移した(サムエル下6・12)。**サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた** 前節にも記述しているように、エリの高齢のゆえかもしれないが、そのことをも主が用いてくださったとみるべきであろう。イザヤの神殿の幻(イザヤ6章)、ベテルにおけるヤコブの幻(創世記28・11〜18)にも、神殿における召命は見取れる。

4 聖書によって多少訳し方が異なるが、内容そのものには大差はない。

5〜9 このような物語の中で、反復の意図するところは重要である。これは、緊張感を高め、召命に対する現実感を聴衆に呼び起すのに一役買っている。一方で、祭司エリは勘違いをして3度にわたってこの少年を下がらせる。先週の箇所と相まって、善良ではあるが霊的に少々抜けているエリの人柄を描き出している。

7 主を知らず 一般的な信仰や敬虔さの意味ではなく、個人的直接的語りかけ、という意味の「知る」。本節では、「主を知る」ということと、「主の言葉」とが並んで語られる。それは、主を知ることとは、人間の知覚的、客観的な対象として「主を知る」ということではなくて、その御旨をみ言葉によって知るといふ、人格的、主観的な関係における「知る」ということなのである。

9 前節後半より、エリはサムエルの上に起こっている出来事を自らの経験によって察した。こうしてついにエリはサムエルに適切な指示を出すことができたのである。

10 主はきて立ち 語りかけるばかりでなく、目に見える形でそばに立った、すなわちここでサムエルは、言葉と幻の両方を受けたのである。この行為は、「しもべは

聞きます。主よ、お話しください」という信仰の姿勢に對する語りかけである。立つ 象徴的に「自分自身を現わす」ことを意味する。

11 耳が二つとも鳴る 想像を超えた厳しい宣告がなされるときの表現である。特に、災いの知らせやその知らせに圧倒されるときの慣用的表現でもある（列王下21・12、エレミヤ19・3）。

12〜14 エリは最後には、その息子たちと共に破滅の道へと歩まなければならない。これは恐ろしい現実である。彼の罪は、息子たちが何をしていたかを知っていたにも関わらず、彼らのその行いを見過ごし続けてきたからである。かつてエリの家について話したこと 2・27

36 祭司の罪のためには犠牲の儀式によって備えがなされていた。しかし、それはあくまで誤って犯した罪のためである（レビ4・2）。しかし、エリの息子たちが犯した罪のように、彼らの冒瀆的ぼうとくな行為に對しては、いかなる犠牲によってもとりなすことは不可能であった。永久に その裁きが徹底してなされることを物語る。

参考図書 5月10日分と同じ。

聖書

サムエル上3・1～14

タイトル

神の声を聞いたサムエル

暗唱聖句

しもべは聞きます。主よ、お話しください。
サムエル上3・9

目標

日々、神の御声を聞いて生きる。

導入

(松浦みち子)

皆さんは名前を呼ばれたら「はい！」って返事ができますか？ 知らんぷりしたり、無視したりするのでなく、いつでもどんな時でも「はい！」と返事しましょう。とても大切なことです。そして、返事をしたら、その通りに行動する。そんな素直な心を神様は祝してくださいます(ジョシユア・レノルズ作「祈るサムエル」の絵用意)。

神様に呼ばれたサムエル

サムエルは小さいころから祭司エリ先生のところに預けられ、神様の仕事のお手伝いをするようになりました。お母さんから離れて寂しかったでしょうね。でもお母さんは、毎年神殿に礼拝に来るとき、サムエルにぴったりの服を祈りながら縫って持ってきてくれるので、サムエルは、お母さんの愛の詰まった服を身に着け、ちっとも

寂しくありませんでした。幼いながら一生懸命、エリ先生にお仕えし、掃除をしたり、明かりが消えないようにともしび皿を磨いたりして働きました。そして「神様のお役にたてますように」と、いつもお祈りする子どもでした(用意した絵を見せる)。

年を取ったエリ先生は、もう目がかすんで見えなくなりました。そして、神様のお言葉もほとんど聞くことができませんでした。そんなある夜のことです。サムエルがいつものように神の箱の置いてある神殿で寝ていると、「サムエルよ、サムエルよ」とどこからか呼ぶ声がします。「はい！ ここにおります」と飛び起きてエリ先生の寝室に走って行きました。「先生、何がご用ですか？」「いいや、わたしは呼ばなかったよ。帰って寝なさい」とエリ先生は言いました。サムエルは気のせいかないと思いい部屋に帰って寝ました。しばらくすると「サムエルよ、サムエルよ」とまた呼ぶ声がします。サムエルはすぐに起きてエリ先生の所へ行き「はい、先生、お呼びになりましたか」。いいや、呼ばなかったよ。サムエル、もう一度寝なさい」。サムエルは夢をみたのかなあと不思議に思いながら部屋に戻って寝ました。しばらくすると3度

目の声があります。「サムエルよ、サムエルよ」。今度こそ間違いではないとエリ先生のもとに走って行って「先生、お呼びになりましたか？ わたしはここにおります」と言いました。その時、エリはハッと神様がサムエルを呼ばれたことに気付きました。エリは「行つて寝なさい。サムエル、神様がおまえを呼んでいらつしやるのだ。今度お呼びになったら『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言うのだよ」と教えてくれました。「不思議なことだなあ！」と思いながら、また横になりました。神様はもう一度、声をかけてくださるのでしょうか。

神様の声を聞くサムエル

しばらくすると「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声がしました。4度目です。先生に教えられたように「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言いました。神様はサムエルにこれから起こることをお告げになりました。それは胸の張裂けるような恐ろしい裁きの言葉でした。神様は「エリは、息子たちがひどく悪いことをしているのを知りながら、注意もせず、叱りもしなかった。エリの家の罪はどんなことをしても赦ゆるされません。わたしはエリの家に永久に罰を与える」という言葉でした。サ

ムエルはひと言も聞き漏らさないように一生懸命耳を傾けました。サムエルが神様の言葉を聞いたのはこれが初めてのことでした。サムエルの最も大切な役割は、神様の声に耳を傾け、人々に正確に伝えることでした。エリの家の裁きを伝えることはつらい事でしたが、これもまた神の言葉をまげないでつたえるというサムエルに課せられた大切な役割だったのです。

神様は、今の時代にも私たちに聖書を通して語りかけておられます。神様に心に向けて歩むならあなたにも神様は語りかけてくださいます。あなたは祈る時、何を最初に祈りますか？ 自分のしてほしいことや欲しいものを願いますか？ 祈る時、一番大切なことは、神様のみこころを知ることです。神様が何を願っておられるのかを聞く心で祈りましょう。「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と。あなたが聖書を読むとき、心の耳を澄ませて、神様の語りかけを聞きとる心で読むと、あなたにわかるように語ってくださいますよ。生きて今も働いておられる方ですから。なんとうれしい神様との交わりでしょう。

♪ 祈ってごらんよわかるから♪ (新聖歌481他)

聖書 使徒1・3・8 テーマ 聖霊の恵みを求める

序論

(福井文彦)

使徒行伝は、単に使徒たちの活動を述べたものではありません。それは聖霊が、どのように主の弟子たちを導いて、福音がユダヤ人社会から、異邦人社会に宣教されて行ったかを記した聖霊行伝です。この箇所には聖霊に關する命令と約束が記されています。

一、キリストの苦難と復活

まずルカは、イエスの死後どのようなことが起こったかを述べています。それは、イエスは苦難を受けたのち、自分が復活して生きていることを示し、弟子たちになびたび現れて、神の国のことを語られた、という出来事です。すなわち、イエスは、私たちのために十字架上で死なれ、人間の罪の結果である死を克服して、よみがえられたのです。それは、弟子たちの目前で起こった出来事でした。復活されたイエスは、たびたび弟子たちに現れて、彼らが心の中で疑ったりする余地がないようにされたの

です(Ⅰコリント15・5以下)。ですから、弟子たちは真正銘、復活の出来事の目撃者にほかならないのです。

イエスは復活され、四十日後に弟子たちの見ている前で昇天されました(9)。その地上の最後の四十日の期間、〈神の国のことを語られた〉のです。神の国は、神の恵みが支配しているところという意味です。それは、イエスの生涯と十字架と復活を通して到来しました。しかし、この神の国は、まだ完全に実現したわけではなく、イエスの再臨によって初めて神の国は完成するのです。

二、父の約束を待つて

〈食事を共にしているとき〉のことです。イエスは〈かねてわたしから聞いていた父の約束を待つているがよい〉と命じられました。さらに〈ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう〉(参考マルコ1・8)と約束されました。

この約束の言葉は、弟子たちに向かってなされたものです。待つというのは、ある時がくるまで何もせずに待つことですが、そのような期間が弟子たちには必要でした。なぜなら、弟子たちは自らの無能無力を知り、聖霊

の力なしには宣教できないことを徹底的に知り、聖霊に満たされる必要があったからです。

この時まで、弟子たちの霊的状态はどうだったでしょう。か。彼らのうちの二人は地位のことで争っていません。また、サマリヤ地方に出かけた時、歓迎してくれなかったことに腹を立て「彼らを焼き払ってしまおうように、天から火をよび求めましょうか」(ルカ9・54)と言いました。ペテロは主イエスを三回も「知らない」と拒みました。弟子たちは皆、主の復活されたとき、あまりの恐ろしさに震え、戸を閉めて鍵をかけて隠れていました。弟子たちは自らの無能無力を知らされ、互いに悔い改め、約束を待ったのです。

三、聖霊を受け、主の証人となる

主から約束を待つように言われた弟子たちでした。しかし、弟子たちは「今」お会いしているこのイエスが、イスラエルを復興されるのではないかと期待していません。そこでイエスは弟子たちの質問には直接お答えにならず、二つのことをお答えになりました。一つは、時期や場合は、神が定められていること。二つには「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、

さらに地ののはてまで、わたしの証人となるであろう」ということです。

①この8節は偉大な約束です。〈聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受け〉ると、言われました。聖霊は神の賜物として受けるのです。

②聖霊は偉大な力です。この〈力〉はギリシャ語で「デュナミス」で、いと高い所から来る力です。その力の源泉は聖霊なる神ご自身です。

③聖霊はご人格を持った「お方」です。聖霊は私たちが罪に勝利できるようにし、清い生活を送らせ、愛のわざをさせ、私たちをイエスに似た者にしてくださいます。

④聖霊を受ける時、私たちは生活を通してキリストを証し、福音を大胆に語る証人となるのです。

結論

私たちがイエスの証人になるため、必要なことは、自らの無能無力を知り、聖霊を受け、聖霊に満たされることです。この聖霊は求める者に、従う者に与えられるのですが、信仰によって受けるのです(ガラテヤ3・14)。

研究資料

(宮澤清志)

この聖書箇所は、聖霊の約束と主の昇天が記されている箇所である。ルカによる福音書の続編ともいわれる使徒行伝の序論としての位置づけをも併せ持つ。

テキスト

3 この節は、内容的には前節の挿入句としての役割をもっており、「お選びになった使徒たち」を説明する役割を果たしている。イエスは十字架から昇天までの四十日の間に、しばしば弟子たちに自らを現され、イエスご自身が本当に死からよみがえられ、生きかえられたのであることをお示しになった。具体的には福音書やパウロの書簡（特に最もよくまとめられている箇所は1コリント15章）に記されている。**神の国** イエスの教え（1）の中心は「神の国」に関する教えであった。神の国とは、神の恵みが支配しているところ、という意味であり、イエスの生涯と十字架と復活を通して神の国が到来したと、そしてイエスの再臨によって神の国が成就することを福音書は証しするのである。

4 イエスは、前節にあるように、自らが確かによみが

えられたことを弟子たちに示すため、しばしば食事を共にされた（ルカ24・41～43、使徒10・41）。エルサレムから離れないで弟子たちは、この時ガリラヤに戻ることを考えていたのかも知れない（ヨハネ21章にはそのことが示唆されている）が、イエスがユダヤ人に拒絶されたその場所で、弟子たちが聖霊による新たな第一歩を踏み出すことが神の御旨だったのである。

5 この約束は、バプテスマのヨハネによって予め示されている（マルコ1・8）。そしてイエスは、ヨハネのこの言葉が成就する時がいよいよ近づいた、と語るのである。旧約聖書の預言によれば、成就の日のしるしとして、神の霊がすべての人に注がれるであろう（ヨエル2・28、29）とある。ヨハネの水によるバプテスマは、悔い改めを迫ると共に、悔い改めた民をやがて来たるべき審判に対して備えさせ、預言者たちが語った霊のバプテスマをあらかじめ予め指し示したものであった。

6 さて 新しい物語の始まりに当たって、使徒行伝において用いられている書き出しの言葉。主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか。ここで弟子たちがいう「国」とは神の国のことであって、

弟子たちは旧約聖書の教えを文字どおりにとつて、神の国がイスラエル民族の独立によって実現成就されるという考え方から抜け出すことはできなかった。この問いは、福音書においても何回か問われている問いであつて（ルカ19・11、24・21）、ルカはここに至つてはじめてこの問いを直接イエスにぶつた。

7 前節の弟子たちの質問に対して、主イエスは直接にはお答えにならない。**時期**（ギ）クロノス）**や場合**（ギ）カイロス） クロノスは、時間の経過を表す言葉であり、カイロスは、定められた時点を表す言葉である。特に、この箇所のカイロスは、時間を支配するのが神であることを明白に示した言葉であり、この二つの言葉が重なつて用いられていることは、終末に至る期間を指していると考えられる（Iテサロニケ5・1）。

8 イエスは、かつて、弟子たちが考えていた政治力ではなく、それよりはるかに偉大な力が注がれるというのである。聖霊が彼らの上にくだる時に、力をいただと語つたのである。その約束の聖霊は、旧約の時代から預言されていたもので（ヨエル2・28～29他）、バプテスマのヨハネによってその到来を告げ知らされていた（マタ

イ3・11他）。**力**（ギ）デユナミス） この「力」とは、単に証言する熱心さや迫力のことではなく、使徒たちが、特別に神から遣わされた者であり、主イエスがともに働いておられることの証拠としての「力あるわざ」（使徒2・22）のことである。また、この言葉は英語のダイナマイトの語源となつた言葉であり、聖霊が与える力はダイナマイトのような大きな力であり、あらゆるものを粉碎し、砕く力がある。**エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで** 使徒行伝は、エルサレム（2～7章）、ユダヤとサマリヤの全土（8～9章）、地の果てまで（10～28章）というように、使徒行伝においては使徒たちが証人として派遣される範囲をも前もつて明確に示している。**証人** ルカは、この言葉を「目撃者」以上の言葉として用いている。「わたしの証人」とは、ルカ24・46～48にあるように、キリストの苦難と復活と宣教されるべき救^{ゆる}しの福音の「証人」ということである。そのため聖霊による力が必要なのである。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New Testament III」(BROADMAN) 他

聖書

使徒1・3～8

タイトル
暗唱聖句

あなたを力づける聖霊（ペンテコステ）
ただ、聖霊があなたがたにくる時、あなたがたは力を受けて、わたしの証人となるであらう。

使徒1・8

目標

聖霊に満たされることの必要を知り、聖霊の恵みを求める。

導入

（松浦みち子）

皆さんは毎日、やる気満々の気持ちで生活していますか？ または、いろんなことに疲れを覚えて、「僕は何をしてもだめだなあ」とため息をつくことがありますか？ 部活動も自分なりにがんばっているけど、今ひとつ成果があがらないし…忘れ物や遅刻、失敗も多くて先生や家の人に小言を言われるし…面白くない気持ちで毎日を過ごす、というようなことはありませんか？ こんな性格や生活が変えられて、喜びと自信にあふれた歩みができるならどんなに良いでしょう。この事が現実となる素晴らしいことが、今から2千年ほど前、エルサレムの町で起こったのです。いったい何が起きたのでしょうか。

復活の確かな証拠と約束

イエス様が十字架で亡くなり三日目に復活された後、四十日間、何度も弟子たちにあらわれて、「私は、死からよみがえったよ」と多くの人に知らせました。また、神の国のことを語られました。そして四十日目に、大勢の人が見えている前で、天にお帰りになれました。

イエス様がまだ地上におられ、弟子たちと一緒に食事をしているときのことでした。イエス様は「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい」と命じられました。どんな約束でしようか？ 「あなたがたは、間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるでしょう」という約束でした。

この約束は弟子たちに向かつてなされました。弟子たちには待つことが必要でした。弟子たちは自分たちの中で誰が一番偉いか、と地位のことで争ったり、十字架につけられようとするイエス様を知らないと言ったりしました。しかも、主が復活された時はあまりの恐ろしさに部屋に鍵をかけ隠れていました。しかし、聖霊を待つうちに、弟子たちは互いに悔い改め、自分たちがどんなに弱いものかを知らされて、イエス様がいらっしやらない

れば生きていけない者であることが分かってきたのです。

上よりの力

わたしはやがて天に帰っていくが、「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と約束されました。聖霊は、第三位格の神ご自身であり、神様からの賜物です。また、偉大な力でもあります。この力は、ダイナマイトのような力であると言われます。ダイナマイトは、どんな固い岩や山でも粉々に砕いてしまします。そのように、聖霊の力は働いて、まるでダイナマイトのように弟子たちを砕いて、全く新しくつくり変えてしまうのです。弟子たちは、イエス様と寝食を共にしましたが、その心の中は、少しも変わっていませんでした。しかし、聖霊がその心の奥底からきよめ、いつでも、どこでも、喜んでイエス様のために命を捨てることのできる人につくり変えてくださいました。イエス様の証人となるためには、どうしても聖霊に満たされることが必要ですね。

聖霊によって変えられた人の証し

みち子さんは、神学校に導かれて入学したものの路傍

伝道が嫌いでした。人前で、しかも道行く人々の心をとらえる証しなんて恥ずかしくて語ることができません。ある人々のように、劇的な人信の経験がないのですから。生まれる前から教会に行っていたこともあり、力強く語ることはできません。ある日、自分に失望して、神学校を辞めてしまいたいと思い、部屋に閉じこもっていました。「イエス様、私にはあなたの良き証人になる力はありません。こんな役立たずの者が、神学校にいていいのでしょうか。さっさと辞めるべきでしょうか」。祈りにもならない訴えをしていました。その時、聖霊がみ声をかけてくださいました。「もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とながつておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたは一つできないからである」(ヨハネ15・5)と、ありのままのみち子さんを覆い包んで、立ち上がらせてくださいました。その日以来、主は真実の限りをつくして支え続けて奉仕の場で用いてくださっています。あなたも聖霊を求めてください。ゆるがない信仰生活をきつと送ることができるでしょう。

♪しゅにしたがうことは♪(こ改19、こ53、ホ87他)

聖書 マタイ4・1～11 テーマ 退けるべき誘惑

序論

(金井信生)

イエスはバプテスマのヨハネからバプテスマを受け、宣教の働きを始めようとされます。しかしその前に、荒野で悪魔の誘惑に会われ、これに打ち勝たれました。イエスを信じて救われた者たちも、また教会も同じ試みに会うからであり、どうすればこれらの誘惑に勝つことができるのかを示すためでした。

一、石をパンに変えて見よ―経済的誘惑

悪魔の最初の言葉は、〈もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんさい〉という誘惑です。イエスは四十日断食しておられ、空腹を覚えておられました。もしイエスが石をパンに変えようと思えばできないことはないでしょう。しかし、この後の福音書を読んでいくと、イエスは、自分の持つ神の子としての力を、一切自分の必要を満たすためには用いません。いつも人の求めに応えられました。

イエスは神の子の力を自分の必要のために用いられないだけでなく、人々の経済的、物質的な必要を満たすためにも用いられません。聖書の時代も今も、飢えに苦しむ人はたくさんいます。荒野に転がる石がパンに変われれば、飢える人はいなくなるかもしれません。しかし、経済的に豊かになっても、それで人が幸せになるとは限りません。

現代は、荒野に湧いた石油によって、その国々は豊かになりましたが、争いもまた繰り返されています。イエスが申命記の言葉を引用されたように〈人はパンだけで生きるものではなく、神の口からでる一つ一つの言で生きるもの〉なのです。

二、宮の頂上から飛び降りて見よ―宗教的誘惑

次の誘惑は、エルサレムの神殿の屋根から飛びおりて見よ、という言葉です。そうすれば、神殿に集まっている多くの人が奇跡を通して、お前を神の子と認め、崇め従うようになるだろうと言うのです。また、神の言葉が、安全を保障しているのではないかとまで言います。

しかしこれも福音書を見ると、イエスは奇跡を行って、むしろ口止めされました。罪の赦しと永遠の命の救

いが誤って受け止められることをとどめるためです。

また、神の言葉を自分の利益のために用いるのは、まったく反対のことです。イエスが『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてあると答えたように、聖書を自分に都合のいいように読むのではなく、神の願い求めておられるところに従うことが、本当に生きがいのある生き方なのです。

私たちが「主を試す」のではなく、主が「私たちを試して」おられます。私たちは与えられた能力を、時間を、財をどのように使っているでしょうか。主はどれだけ稼いだか、どんなことをしたかではなく、与えられたものに「忠実であったか」を尋ねられます。

三、わたしを拜むなら全世界の栄華をあげよう

—政治的誘惑—

イエスはこの後、「悔い改めよ、天国は近づいた」と言って宣教を始められます。悔い改めるのは、まことの神以外を頼りまた支配されていた心であり生き方です。

悪魔は、自らがこの世の所有者であるかのように振る舞います。確かに彼は「この世の君」(ヨハネ12・31他)ですが、それは神の許容の中での限定的なことに過ぎま

せん。この世の現実だけに目を奪われて、この世が悪魔の手の中にあるかのような思い違いをしてはなりません。世界は造られた初めから今も、そして最後に至るまで、まことの主である神様がすべて治めておられます。

私たちがみ言葉によって生かされ、主に従うことを喜び、主を崇めるなら、悪魔は退き、天使が私たちの働きを助けます。それは誘惑に打ち勝たせて主の働きに歩むことを助けるためです。

悪魔はさまざまな手段で私たちを誘惑してきます。しかし、「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」(1コリント10・13)と約束されているように、み言葉によって試練や誘惑に打ち勝つ道が備えられています。

結論

主に従う道を選ぶなら、試練や誘惑は必ずありますが、神のみ言葉によって必ず勝利し、主を賛美する恵みがまし加わることをおぼえましょう。

研究資料

(宮澤清志)

この記事は、イエス・キリストが試みにあわれた「荒野の誘惑」の記事である。Ⅰヨハネ2・16には、人間の根元的な誘惑として「肉の欲・目の欲・持ち物の誇」をあげているが、イエスは罪を他ににして、人間と同様に悪魔の誘惑を受け、そしてそれに打ち勝たれたのである。それゆえにイエスは私たち人間を救うことがおできになるのである。イエスがこれらの誘惑に打ち勝たれた武器は、み言葉であり、徹底した神への服従である。

説教に備えるためには、本日の聖書箇所その他に、特に申命記の引用箇所も開いて頂き、そのことばが語られた背景も思いめぐらしつつ備えて頂きたい。

テキスト

1 イエスは御霊によって荒野に導かれた この言葉から、この出来事は神ご自身のゆるしの中で起こった出来事であったと考えられる。悪魔(ギ・ディアボロス) 語源としては「間を行き交う者」という意味を持つ。神と民との間を行き交いながら、神を人々に誹謗中傷し、人々を神に誹謗中傷する。また人と人との間を行き来し、お互いにお

互いを誹謗中傷する。本日の箇所の中では「試みる者」(3)、「サタン」(10)とも呼ばれている。試みられるこの言葉は「試み」と同様に「誘惑」とも訳すことのできる言葉である。口語訳と新改訳では「試み」、新共同訳では「誘惑」と訳している。この行為を神の行為として訳すと、神はこの行為を通してご自身の栄光を現されるゆえ「試み」となり、また悪魔の側から見ると、この行為を通して人を破滅へと陥れようとするゆえ「誘惑」となる(ヤコブ1・9〜18を熟読頂きたい)。この箇所においては、「悪魔に試みられる」とあるように、悪魔による「誘惑」の行為である。と同時に神の側から見ると、イエスのメシヤとしてのテストともいえ、この両者が同時に存在していると考えられるのである。

2 四十日四十夜 聖書では「四十」という言葉は試練の期間を表すとされている。たとえばノアの洪水は四十日(創世記7・17)、またイスラエルの民の荒野での生活は四十年(申命記8・2)。あるいはイスラエルの兵士がゴリアテの前にして驚き恐れた期間も四十日(サムエル上17・16)。そののち空腹になられた 四十日四十夜の断食の後にすぐに空腹になられたという意味ではなく、この期間の断食の

後に空腹がピークになられた、という意味であろう。この聖書のことばを聞いた人々は、モーセやエリヤの同じ経験を思い起こしたに違いない(出エジプト24・18、列王上19・8)。

3→4 第一の誘惑は、石をパンに変えよというものであった。しかも、自らの力でその奇跡を行うようにという要求であった。しかし、イエスはこれを拒否された。それは、神への従順こそがイエスの生きる道であることの告白でもあった。**あなたが神の子であるなら** 「あなたは神の子であるかないかわからないが、もし神の子なら…」という意味の「もし」ではなく、「あなたは神の子なのだから」という意味である。このことは、既に神ご自身が「これはわたしの愛する子」(3・17)と語られた言葉によって明らかである。**『人はパンだけで生きるものではなく、…』** この言葉は申命記8・3の引用である。イエスはパンの必要性は認める。パンは肉体の維持には必要なものである。しかし、人は、神のみ言葉によって生かされ、養われる。5→7 次の誘惑は、エルサレムの神殿の頂での誘惑である。これが、現実の誘惑ではなく、幻の中での出来事であろう。**『神はあなたのために御使いたちにお命じ…』** こ

の言葉は詩篇91・11→12の引用である。しかし、実はここに落とし穴がある。詩篇の箇所では、本文中に「あなたの歩むすべての道で」(詩篇91・11)という箇所を省いて用いている。聖書のことばを自らに都合のいいように用いることは、悪魔の常套手段じょうとうしゅんであり、古くは創世記3・1のアダムとエバへの誘惑から用いられている。**『主なるあなたの神を試みてはならない』** 申命記6・16の引用。イスラエルの民は神を試みて罪を犯した(出エジプト17・1→7)。イエスは、その生涯にわたって父のみ旨に服従する道を選び取られたのである。

8→10 三番目の誘惑は、高い山を舞台にしてなされた。しかし、この誘惑でも、前の誘惑同様霊的な世界で起こったものであろう。この誘惑は、申命記5・7への挑戦であり、神にささげられるべき礼拝を自らの方に向けることに、悪魔の真骨頂がある。**サタンよ、退け** 消え失せてしまえ、というイエスの強い拒絶がうかがえる。**『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』** この言葉は申命記6・13のみ言葉の引用である。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New Testament I」(BROADMAN) 他

聖書

マタイ4・1～11

タイトル

あなたは、勝利者！

暗唱聖句

サタンよ、退け。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある。

目標

悪魔からの様々な誘惑を、み言葉によって退ける。

マタイ4・10

導入

(飯田勝彦)

みんなは「誘惑」という言葉を聞いたことありますか？
 ダイエットのためスイーツを我慢している人にとつて、ケーキ屋さんから流れてくる甘い香りは、誘惑ですよ。誘惑とは、心を迷わせ悪い方に引き込むことです。みんなは、これまでに誘惑を受けたことありますか？
 惑は誰にでもやってきます。それに勝利する秘訣を心に留めましょう。

誘惑するサタン

世の中には、子どもにも声を掛けて悪い方向に引っ張ろうとする人たちがいます。それは大人であったり、ときには同じ子ども同士かもしれません。

でもその背後に実は、サタンの働きがあることを知っておいてください。サタンは人の心を誘惑して罪を犯させようとします。その目的は、神様から引き離すこと、神様との関係を壊してしまうことです。そして、私たちを不幸にしようと狙うのです。サタンは私たちを罪に陥れようと必死になって誘惑してきます。

しかし聖霊は私たちを守り、助けて下さいます。

誘惑を受けられたイエス様

イエス様は神様ですが、私たちと同じ人間でもあられました。イエス様が、洗礼を受けられた時、どんなことが起こったでしょう。聖霊が鳩のように降り、イエス様は神様に喜ばれる者とあきらかになりました。

その後、イエス様はなんとサタンの誘惑を受けられたのです。サタンは、救い主であるイエス様が誘惑に負けることを願っていました。それは、イエス様が罪に陥れば、人間が救われることもないし、自分も滅ぼされることとがないからです。サタンは必死でイエス様を誘惑しました。

まず、イエス様に石がパンになるように命じたらどうだ、と誘惑しました。イエス様は四十日も食事をしてい

なかったので、腹ペコでした。サタンはそれを良く知ったうえで誘惑したのです。さらには、イエス様を神殿の屋根に立たせて「ここから飛び降りてみる、天使が支えるだろう」と誘惑します。最後にサタンは「自分を拝むならすべてのものを与えよう」とイエス様を誘惑したのです。サタンの誘惑は一度だけではありませんでした。三回もあの手この手を使い誘惑したのです。

サタンは悪賢く、自分の存在を隠し、まるでゆるやかな坂を下らせるよう、みんなを誘惑して来るのです。

誘惑に勝利されたイエス様

サタンの誘惑を受けたイエス様は、その誘惑に負けてしまったでしょうか。また、誘惑から逃げ出してしまったでしょうか。いいえ、イエス様はサタンの誘惑に完全に勝利されたのです。その勝利の秘訣を是非、覚えておいてください。

イエス様がサタンの3回の誘惑に同じように用いたものがありました。それは、聖書のみ言葉です。『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある、『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある、『サタ

ンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」とイエス様は、サタンの誘惑に御言葉で応戦し勝利されたのです。み言葉は神の力であり、剣です。

サタンは、今も働いて神様を愛する者を誘惑します。神様から離れさせて罪の世界に引きずり込もうとします。「礼拝に行かなくても良いよ」、「聖書を読まなくても、祈らなくても問題ないよ」、「みんなもバレないように悪いことをやってるんだから、お前も大丈夫だよ」と私たちを誘惑して来ます。みんなは、その誘惑にどのように立ち向かいますか。しっかりとみ言葉の剣を持ちましょう。み言葉を覚えることは大きな助けになります。

まとめ

これからもサタンは私たちを誘惑しにやって来ます。しかし恐れる必要はありません。私たちには勝利のみ言葉が与えられています。み言葉をしっかりと心に蓄え、悪魔の誘惑に勝利しましょう。あなたは、もう勝利者にされています！

♪おまもりください主よ♪ (ホ100)

聖書 マタイ 4・12～17 テーマ イエスの宣教開始

序論

(石田高保)

イエス様はおよそ30才の時、救い主として世の中に現れ、およそ三年半にわたって神の国を宣べ伝えられた。その間、主が何を語り、どんなことをされたか、いろいろな場面で様々な人生の課題について語っておられるが、それらはバラバラな教えのように見えても、必ず一つのメッセージに集約される。それが17節の「悔い改めよ、天国は近づいた」という言葉である。これは主の説教とみわざを貫く中心テーマであり、言葉と行動によるメッセージの結晶である。

一、神の国の始まり

ここで言われている「天国」とは「神の国」を意味するユダヤ的な表現で、神が王として恵みによって支配する領域、神を信じて従う者たちの間に現れる世界のことである。たとえば教会はクリスチャンが共同体として神を礼拝し、お互いとも交わるので、そこに神の国が現れる。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっ

ている所には、わたしもその中にいるのである」(18・20)とあるように、クリスチャンが二人以上一緒にいれば、そこに神の国が出現する。主の祈りに「御国を来たらせ給え」、これはあなたへの恵みのご支配を来たらせて下さいという再臨の主を待ち望んでいる祈りでもあるが、そういう意味と共に心の中に主イエスを王として迎え、この恵みの支配に与ると、その人のうちに神の国が来たことになる。

では神の国はどのようにして私たちの間に、あるいは私たちの内に来るのか。旧約の預言者たちが「やがて世界に救い主が来て、神が恵みをもって支配する神の国がやって来る」と預言してきたが、今やその「時は満ちた」(マルコ1・15)、まさにご自分が世に現れた今がその時なのだと言われる。つまり誰でも主を受け入れるなら、その人のうちに神の国が来たり、神の恵みによる支配が始まるのである。支配といっても恐怖や強制によるそれではなく、人間の自由意志を尊重したうえで恵みをもって臨む支配である。だからクリスチャンは世の人々とは違う生き方をすることができるようになる。見える世界だけではなく、見えない神の世界を見ることができ

る。「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」(ルカ17・21)という主の言葉は、平たく言えば「私を信じる人の心に私はいるのだ」という意味合いとなる。私自身か神の国だ、神の恵みの支配なのだと言っておられる。神の国がその人の中に始まると、その人は新しく生まれ変わる。福音書や使徒行伝にはこうして変えられた人の記事が満ちている。

二、神の国の力

「神の国が力をもつて来る」(マルコ9・1)とも主は言われるが、これはいつのことか。それは十字架の時である。十字架はサタンを頭とする悪の勢力に対して主が一人で立ち向かったものである。サタンは悪の勢力を総動員して、主を十字架に追い込んで亡き者にしようと力を尽くした。これに対して主は、屠り場に引かれて行く小羊のように全く無抵抗であった。それは抵抗しても無駄だと思ったからではなく、これによって人類に救いの道が開かれるという確信を秘めていたからである。こうして主が十字架にかかって死なれたとき、サタンはこれで完全勝利と思った。しかしここに大どんでん返しがあった。これによって人類に救いの道が開かれたからで

ある。しかも主は死の中から復活した。罪の贖い^{あがな}が完全であり、死の問題が解決されたことの完璧な証拠である。これによってサタンは人間に対する脅しの武器の大部分を奪われた。主は旧約に預言されていた神の救いの計画を成就し、罪の身代わりとしての代価を払い、それによって信じる者たちが、罪とサタンと死の支配から解放されるようにして下さった。信仰によって神の支配にある限り、サタンは指一本触れることができない。外国にある日本大使館は治外法権が保障されており、外国にあってもそこは日本の領土のように見なされる。そのようにクリスチャンもこの世にありながら神の支配を保障されている。

結論

神の国・神の恵みによる支配をもたらせるために、主は言葉で教えただけではなく、奇跡を行うだけでもなく、ご自分の命を十字架で投げ出して下さった。こうして開かれた神の国、つまり神の恵みの支配の中に守られていることを確信し、家庭に職場に地域に神の国を広げさせていこう。

研究資料

(金井由嗣)

主イエスの宣教の開始宣言である。宣教の中心主題は「悔い改め」と「天国（神の国）」である。ルターの宗教改革は、主の「悔い改めよ」との言葉の引用から始まった（『九五箇条の提題』1）。「神の国」は新約聖書、特に福音書を貫く重要なテーマであるため、まず末尾の資料に目を通しておくことをお勧めする。

テキスト

12 ヨハネが捕えられたと聞いて マタイとマルコは共に、イエスの公の宣教がヨハネ逮捕の後に始まったことを強調している（マルコ1・14参照）。一方ヨハネは、それ以前にイエスが弟子たちを連れてガリラヤとエルサレムを往復しながら活動していた様子を描く。後者は少数の弟子たちを連れた律法の教師としての行動であり、前者は一般大衆を対象とした公の宣教活動であるから、両者の間に矛盾はない。マタイとマルコはイエスの宣教がバプテスマのヨハネの働きを引き継ぐものであったことを重視している。ガリラヤへ退かれた イエスがヨハネから洗礼を受けた場所は「ユダの荒野」のヨルダン川

であり、地理的には死海やエリコに近いパレスティナ中部である。そこからガリラヤへの移動を「退く」（ギ）アナコレオー」と表現するのは、「危険を避ける」意味合いを含んでいる（2・22と同じ構文）。ヨハネへの政治的弾圧がイエスにも及ぶことは十分あり得た。

13 ナザレを去り：カペナウムに行って住まれた 四福音書の中でマタイだけが、イエスがこの時に故郷のナザレを「去った」とこととカペナウムに定住されたことを明記している。ゼブルンとナフタリとの地方 ヨシユア記の土地分割の記事に基づく呼び方だが、新約聖書の時代にはもはや一般的な地名ではなくなっていたと思われる。マタイはこの地がイザヤ9・1～2（新共同訳では8・23～9・1）に預言されたメシア登場の舞台であることを重視して、あえてこの地名を用いたのである。

14 ゼブルンの地、ナフタリの地：異邦人のガリラヤ イザヤ書上記箇所引用である。紀元前734～732年にかけてアッシリヤに占領されて以来、ガリラヤ地方は異邦人の支配下にあった。異民族の混住と混血が進み、偶像礼拝が持ち込まれ、厳格な信仰を守るユダヤ人からは「異邦人のガリラヤ」と差別された。そのような霊的「暗黒」

の中にある人々のところから栄光あるメシアの統治が始まるとの預言であった。福音書時代のガリラヤもヘレニズム文化が浸透し、ローマの統治下にあつて異邦人とユダヤ人が混在していた。文化的にも、エルサレムを中心とするユダヤ地方よりヘレニズムの影響が強かった。

16 暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、 イザヤの預言は、暗黒の中で苦しんでいる人々のところにこそメシアの「光」が輝く、という主のみわざの偉大な逆説性を教えている。異邦人に支配されたガリラヤにおいてキリストの宣教が開始された事実には、マタイはイザヤの預言の成就を見るのである。

17 この時からイエスは教を宣へはじめて 公的な宣教の開始についての記録である。宣教の場所は第一に会堂であつた(23節。マルコ1・21、39も参照)。「悔い改めよ、天国は近づいた」 マタイは(マルコとは違って)イエスの宣教のことがバプテスマのヨハネと全く同じ言葉(3・2)で始められたことを重視する。しかしその後の宣教活動において両者の違いは明白となる。イエスの宣教においては病気のいやしと悪霊の追い出しという目に見えるしるしによって神の国の到来が示され、

人々がそこに招かれる(23〜25節)。イエスはヨハネと同様に悔い改めを迫ったが、その目的は神の怒りを免れるため(3・7)ではなく、すぐそこまで来ている「天国」に入るためであつた。福音の宣言である。他の福音書における「神の国」がマタイではしばしば「天国」と言い換えられるのは、「神」ということばの直接的使用を避けるユダヤ人の習慣に由来している。「国」(ギ)バシレイア)は第一には君主の統治権が及んでいることを指す表現であり、メシアであるイエスの到来において神の国は地上に到来し、イエスを信じる人の内に神の国が種がまかれ、やがて目に見える形となって現れる。その完成は主イエスの再臨を待たねばならないが、キリスト者は地上にあつて天の国籍を持つものとして生きることが許され、また期待されている。イエス・キリストの福音はそのような「天国(神の国)」への招きである。

参考図書

① 注解・講解 織田昭、中澤啓介、D. L. Turner (Baker)、J. Nolland (Eerdmans)。② イエス研究 ポウカム『イエス入門』、ハンター『イエスの働きとことば』、ストーリーカー『イエス伝』。③ 神の国について ラッド『神の国の福音』、『聖書神学辞典』。

聖書

マタイ4・12～17

タイトル

イエス様の宣教

暗唱聖句

悔い改めよ、天国は近づいた。

マタイ4・17

目 標

天国の到来を告げるキリストの宣教を覚え、悔い改め、キリストを信じる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、「使命」という言葉を聞いたことがあるでしょう。レスキュー隊員の使命は、人命を助けることです。もし、隊員が自分たちの使命をしっかり自覚していなければ、尊い命を助けることができません。神様は、皆さんにも使命を与えておられます。イエス様の使命は、罪の中にある多くの人を救うことでした。そのためイエス様は、地上に來られたのです。

暗闇に遣わされたイエス様の宣教

「聖書に預言されているように、救い主が来るぞ！」とバプテスマのヨハネは群衆に語り、イエス様の來られる備えをしていました。そのヨハネが捕えられました。

その知らせを聞かれたイエス様は、ガリラヤに退きます。そして、ガリラヤ湖畔の町カペナウムに住みました。

神様がこの地域の人々に対して、預言者イザヤを通してこう言われていました。「異邦人のガリラヤ」、「暗黒の中に住んでいる民」、「死の地、死の陰に住んでいる人々」と。それは、そこに住む人々が神から離れ偶像礼拝を行っていたからです。イエス様は、まずその所に行つて宣教を始めたのです。イエス様の宣教は、罪の暗闇で苦しむ人々の所に行つて光を与えるものでした。イエス様は今も、私たちの暗闇の心に来て下さり、光を照らしてください。

聖霊に満たされたイエス様の宣教

5月24日は、何の日でしたか？ イエス様の約束された聖霊が弟子たちに与えられたペンテコステの日でしたね。イエス様は、弟子たちがイエス様の証人となるために聖霊を与えてくださいました。イエス様を証しするには、どうしても聖霊の力が必要でしたよね。

イエス様が罪に満ちた暗闇に遣わされ宣教されるには、イエス様も聖霊が必要だったのです。ルカ4・14に

は「それからイエスは御霊の力に満ちあふれてガリラヤへ帰られると…」とあります。罪の力が支配している地域や人々に遣わされ宣教するために、イエス様は聖霊に満たされておられました。イエス様の宣教には聖霊の力が欠かすことが出来なかったのです。

私たちも友だちや友人にイエス様を伝えるのは勇気があるでしょう。「聖霊様、助けてください。あなたの力をください！」と求めましょう。

天国へ導かれるイエス様の宣教

イエス様が宣教を始められて最初に言われたことは「悔い改めよ、天国は近づいた」でした。

皆さんは「天国」と聞くとどんなイメージがありますか？ 決して悪いイメージはないでしょう。天国は、死も悲しみも嘆きも労苦もない所です。そして、イエス様の栄光と愛が満ち満ちている所です。天国は、神であり王であるイエス様が中心です。

天国を治めておられるイエス様が、罪の中で苦しみ私たち人間を天国に導くため、自分からこの世界に来て下さいました。イエス様が来て下さったことで天国は私た

ちにぐつと近くなつたのです。

「天国は近づいた」と聞くと、皆さんは「是非、その天国に入りたい！」と願うでしょう。イエス様は、皆さんが天国に入ることを心から喜ばれます。そのために「悔い改めなさい」と勧められるのです。悔い改めは、回れ右と同じです。罪に向かって天国とは真逆に歩んでいた生き方を、回れ右して天国に向かって歩んで行くことです。「天国は近づいた」と聞いただけで、悔い改めの方

向転換がなければ、天国へ行くことはできません。どのような罪をも赦して下さるイエス様を信じて、心から悔い改めましょう。

天国を治めておられるイエス様を信じる時、イエス様は皆さんの心に入って下さいます。そして、皆さんの心を天国のようにイエス様の愛と祝福で満たして下さいます。

まとめ

イエス様は、皆さんを天国に導き永遠の幸せを体験して欲しいと願っておられます。悔い改めて、天国を治められるイエス様を信じましょう。

♪ふくいんのきしゃ♪ (ホ54、イン106、ふ79)

聖書 マタイ6・25～34 テーマ 思い煩いからの解放

序論

(福井文彦)

人間が毎日生活していく上で食物や衣服は必需品です。イエスは空の鳥を養い野の花を装ってくださる天の神が配慮し、それらを与えてくださるのだから、その神を信頼して「思いわずらうな」と戒められました。

一、神への信頼

イエスはまず「空の鳥を見るがよい」と言われました。彼らは生活のために働くことは全くありませんし、食べ物を蓄えたりもしません。その彼らを神は養ってくださるのです。彼らは天の父が与えられるものを集めるだけです。まして、神は人を鳥よりも、はるかにすぐれた者として創造されたのですから必ず養ってくださいます。だから、ただ神を信頼することです。

次にイエスは「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」と言われました。野に咲く花は「働きもせず、紡ぎもしない」のです。それでも神は「ソロモン」の「栄華」、その人工美よりも、美しく飾られました。神

は人よりも劣るものをこのように装われるなら、人間にもっと深い配慮をなさるはずです。だから、ただ神を信じることです。

人は働き、紡がなければなりません。しかし、これら一切のことをなし終えたら、あとは神の摂理にすべてを託すべきです。人は空の鳥を養われ、野の花を美しく飾られるのは「天の父」であるという信仰をもって、神に信頼することです。

二、思いわずらうな

25節から34節には「思いわずらう」(新改訳では「心配する」)が六回出ています。それに対してイエスは「思いわずらう」ことが不必要である理由を語っておられます。

①神は造られた「空の鳥」「野の花」を養ってくださるのですから、それらよりすぐれた私たちを養ってくださるのは当然です(26、30)。

②私たちはいくら「思いわずらう」ても「自分の寿命をわずかでも延ばすことができない」のです。人間の寿命は神が定められることですから、いくら思いわずらっても、少しも延ばすことはできません。それと同じように、いくら「思いわずらう」ても問題の解決に

はならないのです。

③父なる神は食物や衣服（人間の生活必需品）が私たちに必要なことをすべて知っておられます（32）。そのため愛をもって配慮し備えてくださいます。神は決して物質的な必要を軽視したり、無視したりはなさらないのです。だから心配するよりもまず神を信じることです（8）。

④あすのことを思いわずらってはならないのです（34）。人生にはその日その日の苦労があるのですから、一日の責任を果して生きることです。〈あす〉（未来）のことは、神がご支配しておられるのですから思いわずらう必要がないのです。

三、まず神の国と神の義を求める

そこでイエスは〈まず神の国と神の義とを求めなさい〉と命じられました。〈神の国〉とは神のご支配のことであり、〈神の義〉とは神の正しさのことです。ですからそれは、私たちの生活と周りのすべての事において神の御支配と、神のみこころと栄光の現されることを求めて生活することです。言い換えると、自分中心の生き方ではなくて、神を主にして自分を従とする生き方です。それ

は、神に信頼し、服従して生活することです。

〈そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう〉とイエスは約束されました。

〈これらのもの〉とは食物や衣服だけではありません。私たちが人間として生きて行くときにはそうした物質的な必要のほかに、非物質的なたくさんの必要がありますが、それらも含まれています。例えば、健康、知恵、才能、霊的なものもそうです。それらはみな、人間は神によって生かされているものであるとの自覚に立って、神に信頼し、服従して歩むなら備えられると、イエスは言われました。そのような生き方こそは私たちを〈思いわずらい〉から解放して、平安を与え、神の目標に向かって働くものとするのです。

結論

最も大事なことは、〈神の国と神の義〉を求めていくこと、すなわち、神に信頼し、服従して生活することです。そうすれば、食物や衣服という物質的なものだけでなく、霊的なものにおいても、空の鳥を養い、野の花を装われる天の父は、豊かに与えてくださいます。

研究資料

(宮澤清志)

イエスが主の祈りの後に弟子たちに教えられたことは、天の御国の中で弟子たちの歩みであった(6・19～7・12)。新しい契約の中で、御国の民がどのように生きていくべきかを積極的な側面から教えられたものである。その中のひとつとしてこの箇所からイエスが教えられたものは、思い煩いを捨て、神に全面的に信頼していく生き方である。この箇所は、ルカ12・22～32に並行記事として登場する。

テキスト

25 何を食べようか、何を飲むか、…何を着ようか
この当時の思いわずらいのものは、食べ物、飲み物と着るものだったようである。イエスは、これらの思い煩いの代表的な要素を並べ立てて、思いわずらうてはならないとお命じになったのであろう。**思いわずらう** もとの意味は「いろいろな部分に分裂する」という意味の言葉である。また、この言葉はそのような思いわずらいを中止せよ、という強い命令形で述べられている。ルカによる福音書第10章に登場するマルタは、まさにこのような

状況だったと言える(ルカ10・41～42)。彼女は、なくてはならないただ一つのことを心を傾けるのではなく、必要ではない多くのことに心を裂かれていた。

26～27 私たちが読み違えてはならないことは、この節は、前節からの「思いわずらいからの解放」という文脈に沿って読むべきであって、空の鳥のたとえを人間の労働にからめて読むではない。**空の鳥** ルカの並行記事では「からす」となっている(ルカ12・24)。**まくことも、刈ることも** 農業におけるこれらの行為は、当時、男性の代表的な仕事とされてきた。したがって、この節では、男性に対する思いわずらいからの解放を述べているのであろう。**あなたがたは** 強調された言葉であり、鳥に比べてあなたがたこそ、という意味合いの強い言葉であろう。

28～30 こちらも前節までと同様に、「思いわずらいからの解放」という文脈の中で読むべき箇所である。**野の花** 新改訳では「野のゆり」となっているが、本来的な意味は「野生の花」という意味であり、特定の花を指す言葉ではないようである。**紡(ぐ)** この仕事は当時の女性特有の仕事だったようであり、前節までの男性と併

せて、女性にも思いわずらいからの解放を、野の花のたとえを通して語られたものである。いずれにしても、重要なことは、野の花が短命であるにもかかわらず(30)、神はそれらを着飾らせ、養っていて下さる、ということである。

信仰の薄い「信仰がない」と語られていないことに注意したい。直訳すれば「信仰の小さい(少ない)者」という意味である。この言葉はマタイが好んで用いた言葉で(8・26、14・31、16・8、17・20、他にはルカ12・28のみである)、いずれも弟子たちにだけ用いられた言葉である。具体的には、信じるとは言いがくも実際はまったく信じていないことを指す言葉であつて、信仰の不完全とか未熟さを表す言葉ではない。

31 **思いわずらうな** 25節の言葉とは文法的に少々異なり、更に強い禁止の言葉となつてゐる。

32 **これらのもの** 原文ではこの言葉が文頭に置かれてゐる。これらのもの、すなわち食べ物、飲み物、着るものなどが強調して語られてゐる。**異邦人** ここでいう異邦人とは、ユダヤ人に対する異邦人という意味ではなく、天の父を知らないすべての人々を指す(5・47、6・7)。

33 これまでは「思いわずらうな」という、神の民の消極的な生き方を取り上げてきた。この節は、一歩進んで神の民の積極的な生き方を述べる。**神の国** 神がご自身の恵みをもつて支配されることであり、また「天の神がご支配される力強い出来事」を指す。更に、山上の説教との関連で語られるなら、主の祈りを真に生き、祈る神の民の姿として現れる。**神の義** 全被造物に対する神の救いの御計画とみることが出来る。**求めなさい** 求め続けるように、という意味。この命令は、生涯をかけて人間が求め続ける必要があるものである。**与えられる** (神によつて) 加えて与えられる、たくさん与える、という意味の言葉であり、神は、求める人に対して、その人に必要なものを備えて下さる、という意味をもつ。

34 ルカの並行記事には存在しないマタイ独特の言葉。思いわずらつてはならないことを再度警告されたのである。人間にとつては「明日」という日は死ぬまで存在する。しかし、明日のことは誰にもわからない。ゆえに、このわずらいから解放される道は、明日を支配される神を信じて、その神に自分のすべてを明け渡すことである。

参考図書 5月31日分と同じ。

聖書

マタイ6・25〜34

タイトル
暗唱聖句

心配は無用！（花の日・子どもの日）

野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。

マタイ6・28

目 標

必要を備えてくださる神様を信頼し、心配しないで生きる。

導入

（松浦みち子）

今日は教会では「花の日」「子どもの日」と呼ばれています。えっ？ 5月5日が「こどもの日」なのに、と思うでしょう。まずその由来からお話しましょうね。

「花の日・子どもの日」の由来

今から156年も前の一八五六年6月第二日曜日礼拝のことでした。アメリカのある町の教会の牧師レオナード先生は、7才になった子どもたちの名前を呼んで、一人一人名前・生年月日・先生のサインを書き入れた聖書をプレゼントしました。そして、子どもたちの頭に手を置いて、神様の祝福があるようにとお祈りしました。その時、会堂にはリボンで結ばれた花がたくさん飾られていました。礼拝後、その美しいお花を持って、病気の人を見舞ったり、日

頃お世話になっていている人たちを訪問してお礼に行きました。これが最初の「花の日」礼拝でした。その後、あちこちの教会で「花の日」礼拝が守られるようになりました。そして、この日は「子どもを神様にささげる日、子どもの祝福を祈る日」として「子どもの日」とも呼ばれるようになったのです。日本には宣教師の先生を通して伝えられたのです。なんて素敵な日曜礼拝でしょう。

野の花を見よ、そして考えよ

イエス様は「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」と言われました。そこで、今日は、野の花のことをじっくり考えて見ることにしましょう。

①野の花は、働きもせず、紡ぎもしません。イエス様が言われたように、野の花は自分で歩いてどこか別の場所に行くということはありません。ただ、そこに置かれた所にじっとしているだけです。先日、ニュースでこんな不思議な研究発表がされました。北海道の阿寒湖にマリモという特別天然記念物の緑色で丸い形の藻が生えています。ヨーロッパ地方にもところどころにマリモが繁殖しているようですが、DNAを調べて見ると北海道の阿寒湖のものと同じだということです。研究発表によると渡り

鳥が藻を食べた魚を食べ、その鳥が出す糞を通して広がったのではないかと推測する以外に考えられないというのです。本当に不思議なことですね。

②きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草。野の草は、人に見られるから花を咲かせるのでしょうか。いいえ、人に見られようと見られまいと、花を咲かせ、何百倍もの種を実らせるという自分の務めを黙々と遂行しています。明日は刈られて炉に入れられてしまうから、花を咲かすのをやめようかなんて考えもしません。ただ、自分のすべき使命に命を燃やすのです。そして、何をされても抵抗せず、なすがまま、その運命を受け入れます。

③栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていない。今の季節を代表する花はアジサイですね。よく観察してみましよう。小さな花が寄せ集まって大きな花房になっています。その小さな花の一つ一つに雄しべ雌しべがあり、咲いているうちに色が変化していくのです。ソロモン王様の高価な服も、作ったならそのままの形です。しかし、アジサイの花は日に日に色を変化させます。そんな生きた洋服は、世界でまだ発

明されていないでしょう。このように野の花のことを考えると、イエス様の次のことばがぐつと心に迫ってきますね。「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の花でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたにそれ以上よくしてくださいはずがあるうか」と。

心配は無用です！

イエス様は「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな」と言われました。思いわずらうとは、心配して悩み苦しむことです。神様に信頼しない人は、自分の力でどうにかしようとジタバタします。そして心が心配で支配されていると、神様のことも聞こえません。自分が中心になっているからです。「まず、神の国と神の義とを求めなさい」とイエス様が言われたように、神様を第一とする時、私たちの考えは変えられていきます。すべてを良きに導いて下さる神様ですから、明日のための心配は無用です。神様の守りを感謝し、一日一日を喜んで歩んでいきましょう。

♪あすをまもられるイエスさま♪ (ホ66)

聖書 マタイ7・7-12 テーマ 天の父への祈り

序論

(福井文彦)

私たちは神の子とされ、神の子の霊を与えられ、「天のお父さま」と言って祈ることができ者にされたのです。そのために大切なことは、本当に必要であるとの告白を与えてくださるのは、天の父なる神であるという信仰の確信です。

一、祈り求めよ

イエスは祈り求めなさいと言われました。しかも〈求める〉ということばを一度や二度でなく、五度も繰り返し、祈り求めることの大切さを教えられました。そして、その祈りが聞かれるために〈求めよ〉〈捜せ〉〈たたけ〉と。そうすれば、〈与えられる〉、〈見いだす〉、〈あけてもらえる〉と約束されたのです。すなわち、三重の異なった動詞をもって、祈りが答えられる確かさを示し、疑いを持つことなく祈り求めなさいと教えられたのです。多くの人々は祈っても、それが本当に聞かれるという信仰の確信を持っていないのではないかと思います。それ

は天の父なる神が答えてくださるとの信仰を持っていないからです。

しかし、人は誰でも銀行で金銭の取り引きが、郵便局では郵便物の手続きが、食料品店で食物を求めることができますと納得することができます。そのように祈りというものが、神に聞かれ、応えられるとの信仰の確信を持っている人は、誰からも強制されなくても祈るものです。

二、求め続けよ

イエスは、落胆しないで、目的を果すまで祈り続けなさいと三つの動詞で教えておられます(7)。すなわち、〈求めよ〉、〈捜せ〉、〈門をたたけ〉です。この〈求めよ〉、〈捜せ〉、〈門をたたけ〉ということばは、原文では、「求め続けなさい」、「捜し続けなさい」、「門をたたき続けなさい」という意味があります。ですから、〈求め〉ても与えられないからといって、あきらめてはいけません。もし、〈求め〉ても与えられないとするなら、もつと自分から積極的に〈捜〉してみなさい。それでも見出せなかつたら、放っておかずに手から血が出るまで〈門をたたき続けなさい〉ということです。

そのことはイエスご自身の祈りの生活の中にも見られ

ます。主は早朝、人を避けて祈られ（マルコ1・35）、徹夜で祈られました（ルカ6・12）。特に、十字架の前夜のゲツセマネの祈りでは、血のしたりのような汗を流して祈られたのです（ルカ22・44）。その祈りは非常に激しいものであったとヘブル人への手紙に記されています（5・7）。イエスはこのようなご自分の体験を通して、祈りが神に聞かれるためには、「求め続けよ、捜し続けよ、門をたたき続けよ」と、あきらめずに熱心に求めて祈ることを教えられたのです。

三、祈りに答えてくださる天の父

イエスはここでは、祈りに答えてくださる神を、地上における子どもと父親にたとえておられます（9～11）。私たちがイエスの御名をもつて祈るとき、私たちと神との関係は奴隷と主人、富める者と貧しい者のような関係ではありません。父と子との関係であり、しかもこの世の親子関係以上の関係なのです。

自分の子どもがパンを求めたときに石を、魚を求めるときに蛇を与える父親はいないでしょう。〈あなたがたは悪い者であつても〉とは、心が墮落して弱さと悪を持ち合わせている者であつても、の意味です。それでも〈自

分の子供には、良い贈り物を知っている〉のです。それは父親の愛のゆえです。ましてや、天の父なる神は愛の源であり本体であり、善にして、人の心を深く洞察できるお方です。ですから、肉親の父親以上に〈求めてくる者に良いものを〉くださるお方なのです。

神は良いものだけをお与えになるお方であり、神がお与えになるものは、いつも決まって最善のものです。だから私たちは大きな願望をもつて神のもとに行き、必要としているものを求め、しかも不動の信仰をもつて、神が良いものを与えてくださるようと願うことができるのです。神は私たちをこの上なく愛しておられるので、正しく歩む者に有用有益なものを下さるのです。神は、私たちに最善なものが何であるかをご存じですから、その最善のものを与えてくださいます。

結論

人間の親子関係でも、子どもは屈託なくどんな心配事でも父親のもとに持って行きます。そのように、私たちも天の父なる神に熱心に祈り求めましょう。神が祈りに答えて良きものを与えてくださることを信じて祈り求めましょう。

研究資料

(中島啓二)

求めよ、捜せ、門をたたけという三重の命令は、父なる神に対し揺るぎない信仰を持つて祈るようという招きである。親の愛は地上における大きな愛の代表と言えるが、天の父はそれすらも比較にならないほど真実な愛を注いでくださるお方である。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」との黄金律は、その神からの真実の愛を受けているという大前提があつてこそ、意味を持つものなのである。

テキスト

7 求めよ…捜せ…門をたたけ… 三つの命令はすべて現在形で、「…続けよ」と動作の継続が命じられている(ルカ11・8、18・3参照)。並行箇所であるルカ11章では、この命令の前に、長旅で疲れた友人のために隣人にパンを求める人のたとえが語られている。求め、捜し、門をたたけという三つの動作に段階を見いだす解釈もあるが、外してはならない中心的なポイントは、「とにかく熱心に祈り求めよ」ということであろう。「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなた

がたに会うと主は言われる」(エレミヤ29・13・14)との約束でも、「一心に」求めることが条件とされている。そうすれば、与えられるであろう…見いだすであろう…あけてもらえるであろう これらは「神的受動態」と呼ばれ、与え主は言うまでもなく神ご自身である。

8 すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである 21・22の「祈るとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」との約束と比較するときに、そちらの約束が「もしあなたがたが信じて疑わなければ」(21・21)と条件付きであるのに対し、こちらは「すべて求める者は…」と無条件であることは注目すべきである。逆に、祈りの答(与えられるもの)の具体性について見ると、21章では、山が海の中に移るといふような奇跡さえも含む「求めるものは、みな」(21・22)であるのに対し、この7章では、得、見いだし、あけてもらえる、との三つの動詞のうち、三つ目に「門」という抽象的な目的語が示されているのみである。このことは、この箇所での強調点が、与えられる「良いもの」(11)自体ではなく、ご自身の民の必要を満たしてくださる「神の真実さ」に置かれているという

ことを示すと考えてよいだろう。

9→10 パンや魚はガリラヤ地方の日常の食物である。パンを求めるのに、石を 丸い石はパンに形が似ている。魚を求めるのに、へびを へびはガリラヤ湖に生息するうなぎ（律法によって食用を禁じられていた）の一種かもしれない。そんなものを子に与える親はいない。親は真実な愛をもって子の必要に応えようとするのである。

11 あなたがたは悪い者であっても… 特別に悪い人というのではない。天の父の真実と比べたとき、すべての人は、たとえ親切な親であっても、罪深いのである。天にいますあなたがたの父はなおさら… 下等なものに見いだしうる法則が、高等なものにさらなる蓋然性^{がいぜんせい}をもつて当てはまるといふ、ユダヤの一般的な論法。良いものを下さないことがあろうか 「良いもの」は6・31→33にあるような日常生活の必要を除外するものではないが、第一義的には、神の国の祝福という終末的な意味合いを持つものと言えよう。ルカははつきり「聖霊」(11・13)と記している。

12 だから ここまで語られてきたことを大前提として、黄金律が語られている点が非常に重要。何事でも

人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおり

にせよ この黄金律は消極的な形式（～するな）ではすでに知られていた。例えば紀元前後のユダヤ教師ヒレルは「あなたが憎むことを、あなたの仲間に行うな。これが律法の全体であり、その他のものはその注釈である」と教えた。しかしイエスが教えた積極的な形式（～せよ）には、大きな意味の変化がある。キリストはまさに、積極的・自己犠牲的な愛によって律法を成就されたお方である。それゆえキリスト者の生き方も、常識的、律法的な地平から、律法の成就としての愛の地平へと飛翔するべきなのである。律法であり預言者である これは別に、もう一つイエスが律法の要約として示したのが、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ22・39）である（レビ19・18参照）。この7章の黄金律はそれと別物ではなく、少しニュアンスの違った解釈であると理解して良いだろう。自分のして欲しいことを他人にもすることこそが、隣人愛に他ならないのである。そしてそれは、神から真実の愛をもって愛されているのだという実感があつて初めて、人に与えうる愛なのである。

参考文献 4月5日分と同じ。

聖書

マタイ7・7〜12

タイトル

天の父に祈ろう！（父の日）

暗唱聖句

天にいますあなたがたの父はなおさら、

求めてくる者に良いものを下さらないこ

とがあるつか。

マタイ7・11

目標

祈りに答えて良いものを与えてくださる

天の父なる神を信じる。

導入

（松浦みち子）

今日は父の日ですが、皆さんのお父さんはどんな方？
昔から怖いものの代表は「地震・かみなり・火事・おや
じ」と言われていましたが、最近ではやさしいお父さん
が多いですね。天のお父様はどんな方でしょうね。

お祈りはどうするの？

あなたは祈りする時、どのような言葉で始めます
か？ 「神さま」ですか、「イエスさま」ですか、「天の
お父さま」ですか。もちろんどのような言葉でもオッ
ケーですよ。では、イエス様のお祈りはどのような言葉
で始まっているでしょう。十字架にかかれる前のゲツ
セマネの園での祈りは、「父よ、みこころならば、どうぞ、

この杯をわたしから取りのけてください」でした。また、
十字架の上での一番はじめの祈りは、「父よ、彼らをおゆ
るしください」でした。他にもイエス様の祈りを見ると
「父よ」で始まっています。イエス様は神様のひとり子
であられるからこのように祈られたのでしょうか。いい
え、そうではありません。イエス様が弟子たちにお祈り
を教えた下さった時、「天にいますわれらの父よ」と祈り
なさいと教えられました。ですから、私たちが祈りす
る時、神様を「天のお父さま」と呼びするのは、イエ
ス様が言われた通りなのです。力ある、やさしくて何で
も知っておられる神様を「お父さま」って呼びできる
なんて素晴らしいことですね。お祈りは神様とお話す
ることです。お話しですから、よそゆきの言葉を使う必
要はありません。遠慮も要りません。嬉しかったこと、
悲しかったこと、苦しかったこと、お願いしたいこと、
何でも自由にお話ししましょう。でも、神様は目に見え
ないお方ですね。どうしたらお話しできるでしょう。ま
ず目をつぶって「天のお父さま」と呼びしてごらんな
さい。ほら、目で見えるよりもっとはっきり神様のことが
わかるような気持ちになるでしょう。あとはお話しする

よう、「わたしのお祈りに耳を傾けて聞いてください。そして、神様のお話しになることもわたしがわかるように助けてください」と祈りましょう。

求めなさい！

イエス様はお祈りする時、「求めよ、捜せ、門をたたけ」と三回も同じような言葉をくりかえして勧めておられます。しかもこれらは一度限りのことでなく「求め続けよ、捜し続けよ、門をたたき続けよ」という意味が含まれています。それぐらい熱心に祈り求めなさいということです。そうすれば「与えられる、見いだす、開けてもらえる」と言われました。「もしかして与えられるかもしれない」とか、「たぶん与えられるでしょう」ではありません。熱心に、あきらめないことです。

答えてくださる天の父

自分の子どもが「お腹すいたよう、パンをちょうだい」と欲しがっている時、「はい、どうぞ！」と言つて、石をあげる父親はいませんね。また「魚が食べたい」と言うのに、へびを与える父親はいません。自分の子にはできるだけ良い物を与えようとしています。まして、天の父は、私たちを愛してくださるお方ですから、信じて、熱心に

求める時、一番よい時に、一番よい方法で、一番良いものを与えて下さるのです。それによって、神様の栄光があらわされるためなのです。

名古屋教会会堂取得物語

名古屋教会は二〇〇九年秋、開拓伝道40年目に会堂が与えられました。開拓を始めた年は一九六九年、丁度アポロ11号が月面着陸に成功した年ですから随分前のことです。初めは四軒長屋の一つで、次は古い借家を改装して礼拝堂にしました。青空教会学校、路傍伝道、天幕伝道など、中村区6万戸全戸に一枚一枚トラクトを配りもしました。伝道は困難で、亀のようなのろい歩みでしたが、決してあきらめないで一步一步前進しました。日本中を揺るがす不法建築事件の時、借家の耐震調査を受けた結果、危険建物であることが判明しました。それをきっかけに、真剣に地震に耐える建物をと祈るようになりました。心をついにし、熱心に祈り続けたとき、神様は借家の真向かいに、鉄筋のすばらしく頑丈な建物を与えて下さいました。教会の人達だけでなく、町の人々も口々に神様をほめたたえています。ハレルヤ！

いのりにこたえる神さま♪ (ふ60)

聖書 マタイ7・24～27 テーマ 岩を土台とする生涯

序論

(福井文彦)

5章から7章の「山上の説教」の結びとして、イエスは二種類の「土台」のたとえをお話しされました。これはイエスに対するただ二つの応答方法で、みことばを聞いて行うか、拒むかで、私たちの生涯と永遠が決定するのです。同時に、「山上の説教」の目指すところを示しています。

一、人生には堅固な土台が必要である

イエスは最後に、岩を土台として自分の家を建てる人(24)と砂を土台として自分の家を建てる人(26)について話されました。家を建てるときに土台は一番大切な工事です。その家を建てるのに、イエスは岩を土台として建てる人は賢い人であり、砂を土台として建てる人は愚かな人である、と言われました。

なぜなら、岩は丈夫なものであり、堅固なものです。ですから、(雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない)のです。一方砂

は弱く、崩れやすいものです。ですから、(雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどい)のです。

このたとえでは、(家)は私たちの人生になぞらえられています。したがって、(岩)と(砂)は人生の土台のことです。私たちがイエス・キリストを信じたからといって、順風満帆で、御利益があつて、よいことづくめの生活となるわけはありません。イエスを信じたら必ず商売繁盛、無病息災になるというわけにはいかないのです。イエスは(雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて)と言われ、イエスを信じて、さまざまな人生の嵐に会い、人生にはさまざまな試練があると言われました。

ですから、その人生の土台を岩にするか、砂にするかは非常に大切な選択であり、決断を求められるのです。なぜなら、イエスが言われた(賢い人)のように、岩を人生の土台とすれば、試練に会っても、耐えて勝利することが出来ます。また終わりの日の神の裁きの嵐にも耐えることが出来ます。しかし、(砂)を人生の土台とすれば、さまざまな試練は人生を崩壊させ、完全な破滅すらもたらすこととなります。また終わりの日の神の裁きの

嵐にも耐えることができないのです。ですから、人生に堅固な土台が必要なのです。

二、み言葉を聞いて行う

イエスは「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人」と言われました。その「岩」とはイエスの「言葉」であり（1テモテ6・3）、みこころであり、イエスご自身です（1コリント3・11）。ですから「岩の上に自分の家を建て」とは、イエスの言葉を聞いて行うことであり、「聞いて行う」とは聴従することです。そのことをルカによる福音書では「地を深く掘り、岩の上に土台をすえ」（6・48）と言っています。岩の上に堅固な土台をすえるために、土を掘る努力が必要ですが、それはみ言葉を深く掘り下げて学ぶことです。深く掘り下げて学ぶとは、単なる研究ではなく、聖書の正しい理解を持ち、これを敬い、み言葉を日常生活（個人生活、家庭生活、社会生活、教会生活）に適用して生きることです。また、それは謙虚にみ言葉に聴き従うことでもあります。また、神のみ言葉を日常生活に適用することによって、生活の力が与えられます。その確固たる基盤の上に人生という「家」を建てると

です。しかし、この家にも試練のときがやって来ます。「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて」家を打ちつけるとき、これは三重の災難です。屋根には「雨」、土台には「洪水」、壁には「風」の大嵐が襲います。しかし「倒れない」理由は「岩」を土台としているからです。

対照的なのは、「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」です。「砂」とは「土台なしで、土の上に」（ルカ6・49）という意味です。試練が来たとき、その「倒れ方」は「ひどい」のです。「ひどい」とは破壊が完全であるという意味です。理由はイエスのみ言葉を聞いても「行わな」かつたからです。謙虚にみ言葉に聴き従わなかった、すなわち、イエス・キリスト以外のものを頼みとしていたからです。

結論

イエスは、山上の説教の最後のたとえで、主のみことばに聞き従うか従わないかによって、救いか滅びか、いのちか死かが定まると言われました。み言葉を聞いて行う確かな生き方、生涯を送る者とならせていただきます。

研究資料

(中島啓二)

山上の説教はいよいよ最後の部分を迎える。直前の15(20節では「実を結ぶ」ことに、そして21〜23節では「父の御旨を行う」ことに強調点が置かれているが、「(実を)結ぶ」(17)、「行う」(21)の両者とも動詞は[ギ]ポイエオー(第一義は「行う」)である。そして今回の箇所为中心的に命じられている「行う」(24)の動詞もまた[ギ]ポイエオーなのである。このように山上の説教の結論部分では繰り返し「行い」が強調されていることがわかる。人は、イエスの言葉を聞いて、単に知的に満足するだけではなく、「聞いて行う」(24)ことが不可欠なのである。その、聞いた上での「行い」の有無が、終末の審判において、その人が滅びるか否かという結末を決定的に左右するのである。もちろん、この「行い」の強調は、行為義認の肯定でも、信仰義認の否定でも決してない。山上の説教は、それだけで完結するものではなく、神の恵みによる救いという福音を中心テーマに据えた福音書全体(あるいは聖書全体)という大きな文脈でとらえる必要があるのである。神の恵みによって新しく生まれた者は、生き方も

新しくならなければならない。その生き方こそが、イエスとその言葉に土台を据えた生き方なのであり、この賢い人と愚かな人のたとえば、読者をそのような生き方へと誘う招き^{いざな}であると言える。

テキスト

24 それで 以下のことが、山上の説教の結論として語られていることを示す接続詞。**わたしのこれらの言葉**5章から語られてきた山上の説教を指す。原文でも「わたしの」が先頭にあり、そこに強調点がある。キリスト者の行動の基準は、律法の成就として来られた、イエス自身の言葉なのである。**聞いて行うもの** 神の言葉・神の意志に関して、聞くだけでなく、行いが伴わねばならないことが強調されている(12・50、ルカ8・21、ヤコブ1・22〜25等)。**岩の上に** 揺らぐことのない堅固な土台を意味する。イエスは「あなたこそ、生ける神の子キリストです」(16・16)とのペテロの信仰告白を踏まえて、「この岩の上にわたしの教会を建てよう」(16・18)と言われた。イエスの言葉に対する絶対的な信頼と服従に基づく生き方が、その人の人生を揺るぎないものとす。賢い [ギ]フロニモスで「忠実、賢い、眼識ある」と

いう意味。真理を知っているだけでなく、その真理に基づいて行動すること（25・45参照）。「愚かな（ギ）モーロス」（26）と対比。25・1～13の十人のおとめのたとえにも同じ対比が用いられている。マタイにおける「賢い」とは、端的に言えば「忠実、従順」であること。イエスの教えに忠実に従って行動するかどうかが重要なのである。比べることができる。直訳は「すべて」のようである。原文では「ギ」パース（すべて）が節の冒頭に置かれており（26節も同様）、このことが、この警句的なたとえに「招き」の響きを持たせている。聴衆・読者は聞いて行う者となるようにとの勧告・招きを受けているのである。

25 雨が降り…風が吹いて パレスチナに特有の嵐の描写であろう。突風と激しい雨により、通常はワジ（水のない川）であるところに水があふれ流れる。洪水が押し寄せ 直訳は「川がやってきて」。川の氾濫を表すのだろう。旧約では終末の審判がしばしばこういった情景で描かれる（エゼキエル13・10～15、イザヤ28・17等）。その家に打ちつけても 雨、洪水、風のすべてが「打ちつける」の主語であり、その打撃の大きさを表している。

倒れることはない しかし賢い人は最後の審判のときにも滅びない。理由は、岩を土台としている すなわちイエスの言葉に忠実に従って生きているからである。

26 聞いても行わない者 イエスの言葉を聞くだけで行わないことが、その人の愚かさとなる。砂の上に 砂は土台として不適当なものである。

27 倒れてしまふ 愚かな人は賢い人とは全く正反対の結末を迎える。その倒れ方はひどいのである ここまでは一言一句がきれいに対応して比較されてきた両者であるが、この最後の言葉はその対比のバランスを（恐らく意図的に）崩すものである。その倒れ方のひどさは、それほどまでして強調したい要点だと言えよう。すなわち人の運命に対する最後の審判の徹底的な決定性がここには表されている。ここまで述べてきた通り、このたとえの中心的な視点は、最後の審判のときに据えられているが、とはいえ、地上での人生における種々の試練を除外する必要はない。究極的には最後の審判を見据えつつ、人間の生き方は、キリストを土台としているか否かによって、いざというときにふるわれるものなのである。

参考文献 4月5日分と同じ。

聖書

タイトル

暗唱聖句

マタイ7・24〜27
びくともしない土台は？

わたしのこれらの言葉を聞いて行つものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。マタイ7・24
み言葉を聞いて行つ、堅固な生き方をする。

目標

導入

(松浦みち子)

毎年のように大雨が降って洪水が起こり、山が崩れ落ちたり、家や道路がメチャメチャになるニュースを目にしたり耳にしますね。それだけでなく、尊い命が失われるニュースには胸が痛みます。突然起こる出来事に、びくともしない生き方があるでしょうか？

岩の上に家を建てた人

イエス様が二種類の人のお話をされました。はじめは、岩の上に家を建てた人のお話です。この人は頑丈な岩を土台にして、その上に家を建てることにしました。硬い岩まで地面を深く掘り下げ、それから土台を据ええました。「よいしょ、こらしょ」と一生懸命働き、やっとの

ことで岩の上に建つ家を完成させました。ある日のことです。雨がポツリポツリ降り出したかと思うと、大雨になりゴーゴー、ヒューヒューと強い風も吹いてきて大嵐になりました。それだけではありません。川の水が溢れ、洪水となりその家に押し寄せてきました。でも、岩の上に建てた家は、とても頑丈で、びくともしませんでした。硬い岩を土台としていたからです。

砂の上に家を建てた人

もう一方の人のお話です。この人は、砂地の上にそのまま家を建てました。地面を深く掘るのが面倒だったからです。工事はどんどんなはかどり、見る見る間に大きな立派な家が出来上がりました。この家にも嵐が襲ってきました。ポツポツ雨が降り出したかと思うと、やがて大雨になり、洪水が押し寄せてきました。メリメリ、バキッ、バキッ、ズズズと家が傾いたかと思うと、あっ、大変！ドッカーンと大きな音と共に家が倒れてしまいました。家はペッシャンコになり、もう直すこともできないほどひどい倒れ方でした。この家の土台は砂地だったからです。

み言葉を実行する人

イエス様はこうおっしゃいました。「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう」、また「わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう」。

あなたはどちらでしょう？ 賢い人？ それとも愚かな人？ また、次のようにもおっしゃっておられますよ。『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」と。

ただ、みことばを聞くだけではいけません。イエス様を信じ、イエス様のお心を知ってみ言葉を実行する者だけが天国に入ると、言われました。やがて私たちは大人であつても子どもであつても最後の日を迎えなければなりません。それはいつか？ だれも知りません。東日本の震災が私たちに多くのことを教えてくれます。決して忘れてはなりません。私たちは今を生きるものとして、この惨事を目にした目撃者だからです。

びくともしない生き方とは、み言葉を土台とした生き方です。「天地は滅びるであらう。しかしわたしの言葉

は決して滅びることがない」(ルカ21・33)と宣言されています。私たちの人生には色々の事が起こります。思わぬ病氣になったり、人に裏切られたり、誤解されたり、失敗したり、肉親と別れたり、このような嵐が襲って来ることがあります。でも、どんな嵐の中を通されても、み言葉に土台を置いて生きるなら必ず神様の助けがあります。「下には永遠の腕がある」(申命記33・27)と約束されているように、力強い主のみ手が私たちを支えて下さるからです。さあ、あなたもみ言葉をしっかりと心に蓄えて実行する人になりましょう。

最後に、コーリー・テン・ブームというオランダの婦人のあかしです。彼女は命を狙われているユダヤ人たちを助けたという罪でドイツのナチ収容所に入れられました。その中で、み言葉を信じ続け、神様こそ隠れ家、避け所であることを体験したのです。ノミだらけの藁の布団を与えられた時も、すべての事を感謝しなさい、というみ言葉で「気持ちのいい環境だけを感謝しなさいとは書いてないわ」と、ノミのために感謝をささげたそうです。み言葉を土台とする堅固な生き方ですね。

♪かしこい人とおろかな人♪(ホ24)

牧羊ひろば



防府新田教会 教会学校

●防府新田教会

教会学校の過去、現在

始まりは、教会が創立した一九九二年から数年経ってから、必要を感じた教会員の方が当時担任教師であられた森英樹先生に要望されて、そのために祈って準備していきましようという森英樹先生の掛け声で、始まったそうです。

当初は、ご主人がノンクリスチャーの教会員の方のため、日曜の朝は難しいということで、月に一回CSの時間をとって下さっていたようです。三時や三時半に来て行なわれていたそうです。

最初から、親である教会員の方が補助教師のような形で、教師のための学びを森英樹先生にして頂き、メッセージも順番で担当して色んなことを分担しながら、みんなで力を出し合いながら始めて行かれたそうです。それが段々、日曜の朝に時間を取り分け

ましようということになり、日曜日の朝にCSが持てるようになったのが、二年目頃からだったそうです。

主がCSを祝福してくださって、子ども達が大きくなるにつれてお友達もたくさん来るようになったそうです。特に教会学校の生徒さんのお友達や近所の子がたくさん来るようになって、竹崎光則先生の頃は、パワーあふれる男の子たちでいっぱいだった時期もあったそうです。

後藤が前任の梅原基先生から引き継がせて頂きました時は、信徒子弟を含めて十人前後の子ども達が参加しておりましたが、その子たちが中高生になっていく中で、段々と教会に来なくなりました。年に数回、その中高生の子たちの中から、信徒さんのお子さんが部活や塾や学校のない日にたまに教会に集っているのが慰めです。普段は、信徒さんの小学校と幼稚科の子ども達が集っています。

一、通常の礼拝

現在は、教会学校の礼拝を日曜日朝九時十五分から十時十五分に行なっています。まず、お交わりの時間とし

てゲームや工作など（月に一回絵本の読み聞かせ）を九時半まで行ってから、礼拝を始めます。年に何回か、大人の礼拝に合流する時もあります。プログラムとしては、①前奏のうちに黙祷 ②賛美 ③司会者の祈り ④主の祈り ⑤その月のテーマ賛美を、お友達に覚えてもらう目的を持って選曲し、一緒に歌います。⑥み言葉暗唱タイム ⑦メッセージ ⑧賛美 ⑨献金 ⑩頌栄 ⑪牧師による祝福の祈り ⑫お知らせ ⑬分級（幼稚園、小学科、中高科）、です。分級の時間に、ワークや工作をそれぞれの科ごとに行なっています。毎月の最後の週にはお誕生会をしています。

二、主な年間行事

春は、進級お交わり会の時をもっています。一緒に食事をしたりゲームをしたりして、進級のお祝いをします。イースター愛餐会と合流してお祝いした年もありました。

また、礼拝の中で子ども達の祝福を祈る進級式も行なっています。その時には、小学校入学者には新約聖書をプレゼントしています。

イースターにはイースターエッグづくりをしています。用意したゆで卵をお湯にくぐらせてつけるエッグラッピングですが、子ども達も楽しそうです。白いカプセルにお菓子を詰めて隠したエッグハントをした年もありました。

母の日のプレゼント作りもしています。過去には、植木鉢に絵をかいいたり、カーネーションをプレゼントしたり、カードをつくったり、教会の入り口のデコレーションをしてお出迎えをしたりしました。

父の日には、親子で一緒に遊べるものを、と考えて牛乳パックでカエルをつくったり、小石にペインティングしてプレゼントしたり、カードを作って渡したりしました。

夏は、サマーバイブルスクールという、日帰りの教会キャンプをして、朝から夕方ごろまでお友達と楽しくふれ合いの時間を大切に持っています。プログラムの流れとしては、主に、賛美、ゲーム、聖書のメッセージ、昼食、工作、おやつタイムです。昼食のメニューは、スパゲティ、オーブンサンド、オニギリなどでした。工作は、プラ板、牛乳パックヨーヨー、万華鏡作りなどをしまし

た。おやつは、かき氷の年が多かったですが、パフェや
すいか割りのすいかの年もありました。



2012年 サマーバイブルスクール
プラ板工作

秋は、子ども祝福式を赤ちゃんから小学生生までを対象
に行なっています。プレゼントの内容は、その年と年齢
によって違います。プレゼントと一緒に言葉のオリジ
ナルカードや、メダルを作って渡した年もありました。



2013年 子ども祝福式

冬は、毎年子どもクリスマス会をしています。通年、
賛美とメッセージ、ゲームや紙芝居でしたが、二〇一四
年は、クリスマス賛美の後、年配の信徒さんのご指導と
お手伝いの中、おもちゃと一緒に丸めて食べました。その
後、DVD「おめでどうイエス様」を見て、クリスマス
メッセージを聞きました。帰りには、お菓子にクリスマ
ストラクトを添えて、プレゼントを渡しています。今年
は、初めて来た子どもたちが、聖書がほしいと言うので、
ギデオンの新約聖書を渡しました。

クリスマス礼拝では、以前は、聖誕劇を行なっていたが、最近では、人数の減少と低年齢化、練習時間の確保等の諸事情により、その年に集まる子ども達に合わせ、クリスマス賛美を歌ったり、クリスマス賛美曲を楽器演奏したりしています。



2013年 クリスマス礼拝
子ども賛美

三、教会学校の現状と課題

現在、普段集っている子ども達は教会員の子とも達です。時々ノンクリスチャン家庭の子たちが来ますが、ほ

とんどメンバーは変わりません。一人一人が貴重で、休むと本当にさみしくて祈られています。日曜日の午後からひよこつと近所の子が遊びに来たりはしますが、教会学校にはつながっていません。そのような中、今年、普段集っている子どもたちの中から、三名の子が洗礼を受けました。ただ主に感謝です。継続教育が今の課題です。

また、中高生になった時、どのように導いていくのが課題です。以前は来ていたけれども、今は来ていない子たちには、お誕生日のメッセージカードをCSの先生方とよせ書きをして送ったり、月一回、中高生リフレッシブタイムという時間を設けて、その案内とメッセージのカードを届けています。

何よりイエス様につながってくることが一番なので、私たち教師が心がけている事は、子ども達一人一人のために、神と人々に愛される信仰者に成長してほしいと祈りながら、大切に愛し続けることです。主ご自身が愛されている子どもたちのために、これからも主により頼みつつ主の業に励んでいきたく願われています。

(後藤栄子 一部、後藤健一が加筆修正)

二〇一五年度カリキュラム解説

三年カリキュラムの二年目となります。今年度カリキュラムについて、簡単にご説明致します。なお、今年度カリキュラムだけでなく、三年間分のカリキュラムも、教会教育室ホームページからダウンロードして頂けます。適時ご利用ください。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、三年かけてひと巡り学ぶようになっています。今年度はその二年目として、「士師」「王」を学びます。ストーリーの連続性がありますので、毎回のメッセージの内容と共に、前後の流れも踏まえつつお話しくださるとよいでしょう。

②新約聖書

新約聖書からは、毎年、キリストの生涯全体をひと通り学べる形にしています。5月以降の「キリストの教え」、9月のラリー・デーから再度「キリストの教え」、更に「キリストとの出会い」、1月からは「キリストの十

字架の道」を学びます。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

旧新約聖書からの学びの合間に、例年通り、教会暦や年間行事を踏まえてのカリキュラムも組み込まれています。昨年度末の受難週に続き、4月はじめには、単元「復活」が置かれます。新しい環境の中にある子どもたちに、復活のイエス様による喜びと平安をお伝えできたら幸いです。更には、「聖霊」(ペンテコステの日)、ラリー・デー(9月6日)、「クリスマス」「年末」「年始」。また、「キリストの十字架への道」の学びの最後は受難週に至り、年度末の「復活・昇天」(イースター)へと続きます。

④テーマ「キリストに出会う」(ルカ19・10)

今年度のテーマとしては、「キリストに出会う」としました。単元「キリストとの出会い」では、特にキリストに出会った人々を取り上げていますし、それ以外の単元でも、キリストとの人格的出会いに導くことのできる内容が多くあると思います。新しくキリストに出会う者たちが起こされますように。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA（幼稚科向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円＋税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇一五年度第I巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。「二〇一五年度カリキュラム解説」を記していますので、参考にしてください。教師養成講座は、今号も、神戸中央教会の田中恵子姉に「♪さんび・・・まず、あなたがいきいき! No.4」を書いていただきました。「牧羊ひろば」は防府新田教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解	研究資料	メッセージ例	ワーク(A)	ワーク(B)	中高科へのヒント (C)	子ども聖書日課 フラッシュカード	み言葉カード ・イラスト	ワープロ打ち込み	校
石田高保師	福井文彦師	宮澤清志師	中島啓一師	松浦みち子師	水野晶子師	鎌野幸師	勝田幸恵師	竹崎光則師	上森恭子師
高橋頼男師	大頭眞一師	小平徳行師	金井由嗣師	飯田勝彦師	野勢かほる師	吉田美穂師	山下大喜師	田中裕明師	後藤健一師
金井信生師								金田ゆり師	小野淳子師
								佐藤由香師	後藤栄子師
								丹羽 遥師	金田ゆり師
								多田豊子師	加藤 清師
								長田栄一師	山田和幸師
								中島啓一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一五年度 I巻

二〇一五年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室

電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み